その舊教を非難して新教を唱へ、人は皆等しく神の子であるから、何等の仲介を要せずして直に神に接するを得べし、と主張するや、舊教徒殊に羅馬法王の迫害を被ること甚しく、幾度か死生の巷を出入した。然し彼は自ら信ずる所を執つて枉げなかつた。

嘗て獨逸の新帝チャールスが、暴慢なる羅馬法王の强請を容れて、ルーテルをヲームズに召すや、ルーテルの諸友は、

『ホッスが羅馬法王の毒手に倒れた前例もあるから、切に行つてはならぬぞ。』

と、强て引留めようとした。然るにルーテルは憤然として、

『ホッスは燒殺されても眞理は滅びぬぞ！』

と叱して、やがて召さるまゝに出かけた。

その途中に於て尙もルーテルの知己スパラテインは心配の餘り、密使を以て再三その出府を止めた。その時も亦ルーテルは憤然大喝して、

『たとひ惡魔はヲームズ全部に充滿すとも、余は其間を搔きわけて進まう。』

あゝ眞理の爲には命を捨つることをも尙ほ惜まぬ彼の膽勇眞に新教の始祖たるに耻ぢぬ。

公爵夫人ビスマルクを弄す

獨逸の鐵血宰相ビスマルク、事を以て千八百七十八年墺國ウイーンナに赴いた時、或る席に於て頓智に名を得た某公爵夫人に遇ひ、

『ご機嫌は如何、お宜しい方ですか。』

と問うた。妙辯なる夫人は直ちに、

『いゝえ甚だ惡くて困ります。』

ビスマルクは色を作して何事か言はうとすると、早くも夫人はそれと見てとり微笑しながら、

『凡そ當府の婦女は、他國の使節の見える毎に、その何用を以て來られたかを知らぬ間は、皆心配するのが常です。妾の心配も矢張それです。』

此に於てビスマルクは、

『それは驚きました。左樣なれば余の心腹を傾けて語りませう。余は親友なる貴國首相アンダラシー君に面會して、一の磁針を求める爲にやつてきたのです。抑も此針は太平と號し、歐洲全國の平和を吸ひつけてしまう効能があります。』

夫人はここぞと思ひ、

『ご來墺の意は洵に左樣ですか。想ふにその磁針も亦北の方を指すものでせうね?!』

蓋し墺國より北にあたる獨逸の跋扈を屈して、全歐洲の平和を計るためであらうとの意である。ビスマルクは大口を開いて、

『アハハヽ、談判は已に盡きた。これから早速歸つて獨帝に復命致しませう。』

と哄笑した。

ヂスレリー夫人内助の功

英國のビーコンスフイールド侯ヂスレリーが、布衣より起つて遂に宰相の榮

位を極むるに至つたのは、氏の夫人の内助に負ふ所が多い。

議會に於て彼が演說する時は、傍聽席にある夫人の眼光に勵まされ、政策を案ずる時は常に慧敏なる夫人の考案に負ふ所が多かつたといふ。實に彼は大半夫人の内助の功に依つて宰相となつたのである。

故に嘗て英國女帝陛下から金冠を授かり且つ子爵に列せられやうとした時の如きは之を固辭して、

『臣が功にあらずして妻の功でございますから、願くは妻にお授け下さい。』

と申上げた。そこで夫人は子爵で、その良人は依然として一介の國會議員であつた。

ジスレリーは妻に後れて死んだ。その時政敵たるグラッドストーンは、氏生

前の勳功を表彰し、之を國葬にしようとした。然るに遺族は、

『遺言に違ふから。』

とて之を謝した。氏の遺言といふのは、

『我が死後は、亡き妻の墓側に、亡き妻を葬つた時の如くにして葬れよ。』

といふのである。勿論夫人は國葬でなかつたから、乃ちジスレリーも亦た略式を以て葬られた。夫人内助の功また大なりといふべし。

リンコルンとツランブル互に選擧を讓る

一千八百五十四年、米國の上院に一名の議員改選があつたので、『リンコルンは自ら之に當らうと欲し、合衆黨の小巨人と稱せらるゝ某壯年政治家と競爭し

殆ど全勝を得べき狀態にあつた。

然るに是より前、共和黨の中に、右の議員候補者豫選の際二派があつて、一方はリンコルンを擧げ、他方はツランブルを選んだ。そこでリンコルンは、自分を選んで呉れた方に向つて、

『鷸蚌の爭は自黨の不利である。特にツランブル氏は余の刎頸の友であるから氏の選ばるゝのは即ち余の擧げらるゝに等しい。故に余は氏に候補者の地位を讓らう。』

とて、斷然彼にその位地を讓つた。

然るにツランブルの方でも亦た、

『いや拙者は是非リンコルン氏に代つて頂かうと思ふ。』

とて、互に讓つて暫しは決しなかつた。が、リンコルンの決心は到底動かすことが出來さうにもなかつたので、ツランブルは已むを得ず之を受けた。

滿座の人々は皆此有樣を見聞して、リンコルンの潔白に感じて落涙したといふ。是に於てかツランブルは遂に大多數を以て上院議員に當選することが出來た。

チエルの矮身その命を救ふ

佛蘭西の大政治家チエルが未だ少壯の時、エーキスといふ處に在つて、一女子と親み、遂にその女の親の許可を得て婚約し、且つ

『他日獨立自活が出來るやうになつたら必ず御身を迎へよう。』

とて、身は巴里に赴いた。

爾來彼は世の荒浪に飜弄されながら、功名榮達の念に驅られて、他を顧るに遑あらず、爲に女子より頻りに結婚を迫らるゝも、言を左右に托して應じなかつた。

そこで娘の父は激怒して、遙々と巴里へやつて來て、チエルに面會し、その變心を痛罵し、遂に決鬪を申込んだ。チエルも亦た勢ひ辭する能はずして之に應じた。

翌日定刻に二人は鬪場に落合つた。チエルは從容天に向つて發射したが、娘の父は凝心一發チエルを射た。チエルは體軀極めて矮小であつたから殊更に高帽を戴いて之を掩うて居つた。然るに幸にして銃丸は帽子を打拔き、命には別

條なかつたものゝ、若し帽子が低かつたら見事その頭をやられて居つたに相違ない。

フランクリン菜食す

一日、フランクリンは書を讀んで、肉食の非を論じ菜食の功を述べたる一章に至り、ハツタと會心の膝を打つたが、爾來肉食を禁じて、毎日菜食した。そこで彼の友人は皆その奇を笑つた。然るにフランクリンは一向平氣で、

『菜食ほど良いものはないよ。體の爲にはなつて、其上食費は半分しかかゝらないし、好きな書物も買へる、その他色々の利益を得る。』

と、却つて人に誇るのであつた。

尙ほフランクリンは人々に向つて、

『予がまだ苦學して兄に活版所に在つた時は、晝になると予が兄や職工達は、予を工場に殘して食堂へと去つた。然るに予は獨り工場に在つて一片のパンと一杯の水と、それに唯だ一切れの菓物とを以て食事を終へ、皆の歸るまで書物を讀んだ。予が今日明かなる考察力と速かなる理會力とを有するのは、則ちその昔飲食を節制したからである。』

と說き聽かせた。

スキフト友人の美服を忌む

或る日英國ダブリンの活版業者フォークナルといふ者、ロンドンより歸國して、錦繡を身に纏ひ、得意然として『ガリヴアー巡島記』の著者スキフトを訪うた。

かくて一室に入り、

『これは〳〵暫くご無沙汰致しました……えゝ……。』

スキフトは彼の樣を見ていと不興氣に、皆まで言はせず、

『あなたはついぞ見知らぬ人、お名前は？』

フォークナルは吃驚してしまつて、

『これはしたり、フォークナルをばよもやお見忘れはなさるま……』

『あなたは必定詐僞師に相違ない。疾く〳〵此處をお立ちなさい！』

フォークナルは暫し狐につままれたやうに呆然として居つたが、

『さては……よし〳〵……わかつた……なある程。』

と、直ちに家へ歸り、此度は常着の質素なるを着、再びフキフトを訪れると、前とは打つて變つた待遇ぶり、

『これは〳〵お久しぶりで御坐つた。實は先刻美服を着けた輕薄者が御身の名を騙つて逢ひに來ました。けれども余は常々御身が質素にして正直一遍の人といふことを知つて居りましたので、その手は食はなかつた。』

君臣水魚の交り

伊太利のカブールは佛帝ナポレオン第三世を籠絡して墺太利を挫き、國内の志士を糾合して、伊太利統一の基を開いた人傑である。

伊太利皇帝は常々彼が大功を嘉し、彼の訃報を聽かるゝや、

『朕若しカブールに代つて死せば、伊太利の患害はその量を減ずべきに。』

とて、潸然として涙を流されたといふ。

曾てカブールが外國に使して使命を完うし、豫定の政略を遂ぐるに至るや、國民はその到る處に於て之を歡迎し、殊にチユレン府民の如きは、歡喜の餘り殆ど彼の乘車を覆すに至つたといふ。

翌朝カブールは伊皇に謁して、昨日府民の歡迎の盛況を申上るや、帝は之を遮つて、

『復語るなかれ復語るなかれ、朕は具にその實況を知つてゐる、足下よりも詳しく知つて居る。足下が樓上に立つて衆民の歡呼に答へたとき、朕は衆中にあ

つて衆と共にカブール萬歳を連呼したのだ。
君臣水魚の交り、實に伊國の起る所以である。

ブラツドロー警視總監を說破す

ロバート・ヴエーノル氏が日曜商業禁止案を英國議會に提出するや、反對の聲は沸然として起り、人心大に激昂した。

フオドレノー氏の如きは大に同案を非とし、檄を四方に飛ばして、民衆をハイドパークに集めた。檄に應じて集るもの雲霞の如く、數百旒の旗を風に飜し鯨波を擧げつゝ、異句同音に、

『壓制！壓制！壓制！』

と絶叫して、議會に雪頽れかゝつた。その混雜實に名狀すべからず。

時に警視總監リチャード・メインは、命を傳へて、此民衆に解散を命じ、若し命に背くときは已を得ず非常手段に行ふべしと威嚇した。けれども颱風の煙塵を揚ぐるに似たる數萬の群衆は、耳にも入れない。果は瓦石を飛ばし、火を投じ、瓶を拋ち、益々擾亂を極めた。

かくの如き殺氣漲れる中に、ブラツドローは群衆の先頭に立ち、一方民軍を叱しながら、警視總監を執へて、

『總監の命令は甚だ不當である。リチャード君は吾人集會の自由を妨ぐるの權を有せぬ。君の行爲は背憲である！』

と、得意の法理論を以て、滔々懸河の辯を揮つたので、總監は青くなり、民衆

は、

『ブラッドロー君萬歳！〳〵』

と等しく喝采した。

詩人プーシキン傳女に感化せらる

露國に於ける知名の詩伯プーシキンは、幼時頗る大なる感化をその守女から受けた。

そのお守といふのはロデオナと呼んで、農家の一老婦であつたが、プーシキンは常にこのお守を愛慕した。彼女は多くの昔話を知つて居つたので、常にプーシキンに語り聽かせて樂ませた。彼は成長の後も尙ほお守の物語を聽いて多

の長夜の徒然を慰めた。

故に彼は、

『余の詩才は彼女の感化によつて開發されたのである。』

と感謝してゐたといふ。彼の詩に、幼時その聞き得た所の物語又は歌などが見えるのは、全く彼女の感化である。

ナポレオン衆と共に徒歩す

ナポレオン第一世は、部下を愛すること恰も慈母の愛兒に於けるが如くであつた。

曾て埃及に遠征を試みる時、時恰も夏にして殊に熱帶の沙漠に近い所のこと

とて、炎暑燒くが如く、瘴癘人を冒し、士卒の艱難一方でなかつた。それと見るやナポレオンは一令を下して、

『騎する者は皆徒歩して、患者をして代つてその馬に乘らしめよ。』

偶々一兵卒馳せ來つて、

『元帥のご乘馬には孰れを充てませうか！』

ナポレオンは之を叱して、

『汝はまだ余の命令の意が解らぬか。衆の苦を顧みずして余のみ如何して騎行されるか。余が先頭に徒歩するのだ。』

と、乃ち患者を乘せた馬の傍に添ひ、且つ慰め且つ歩いた。

奈翁哨兵に代る

ナポレオン第一世がマンチエスターを攻めた際、一哨兵が疲れて樹根を枕にして眠つて居つた。奈翁は之を視て、

『可愛想に、餘程疲れたと見える。』

と獨言しながら、その兵卒の銃を取つて自ら之を肩にし、見張ること半時許り偶々哨兵は目を醒まし、此體を見て吃驚仰天し、恐懼の餘り、身を投じて奈翁の足下に平伏叩頭した。

ナポレオンは毫も怒れる色なく、徐ろに之に諭すやう、

『醒めたのか、醒めたのか。汝の銃は余が能く之を保有して居る。實に汝は長

途を馳せ且つ能く苦戰した。汝の眠るのも尤もである。けれども目下の瞬間の息りは、全軍の勝敗に關り、實に容易ならぬ時である。吾れ今日幸に代つて汝の職務を完うした。今から再び斯る息りをなして、全軍の存亡を度外に置くなよ。』

ナポレオン傷卒を慰撫す

アウステルリツヒの戰に奈翁は墺魯の聯合軍を破り、還つて戰場に來て見ると、日既に暮れて人面を辨じない。仍つて左右に命じて聲を立つるを禁じ、耳を澄して傷者の呻吟を聽察し、うめき聲を聽けば乃ち馬から降りて親ら之を慰め、或はブランデーを與へて飲ませなどした。

かくて終夜親兵をして戰場を巡檢せしめ、既に死んだ者の外套を剝いで、まだ死なぬ傷兵に着せ、且つその傍に火を點じて、

『悉く傷兵を病院に送るまで退散してはならぬ』

と命じた。士卒を憐むの情洵に深しといふべく、彼が大功を成した所以實に故ありといふべきである。

ネルソン死に頻して尙ほ士卒を思ふ

ネルソンが佛艦をアボルギルに敗るや、大提督の美服を著て上甲板に立ち指揮をして居つたので、敵は彼を目がけて彈丸を雨注した。會々一彈飛び來つてネルソンは甲板上に倒れた。

ベルリーは大に驚き、彼を扶けて艦室に退かしめた。ネルソン素より片眼隻臂、此に及んで面皮爛れて眼を掩ひ、物を見ることが出來ぬ。此時軍醫は兵卒の負傷の手當に忙殺されて居たが、提督傷けりと聞き、大に驚いて駈けつけてみると、ネルソンは從容として、

『兵卒は余より先に傷いたのであるから、彼に手當を加へて後余に及べ。』

とて可かなかつた。此言を聞き一艦悉く感泣したといふ。

シドニー重傷して尙ほ部下を愛す

フイリップ・シドニーは英國の猛將である。曾て西班牙の役に重傷を受け、倒れながら大に渴を訴へた。その時一兵卒が少しばかりの水を持つて駈けつけたので、シドニーは大に喜び、將に之を飲まうとする時しも、偶々一兵卒が、傷を蒙り、人に扶けられて其前を通りかゝり、シドニーの水を見て大に羨める面持をしてゐた。シドニー乃ち其水を彼に與へて、

『汝の渴は予よりも甚しからう。』

とて、更に吝む樣子もなかつた。

名優ヘンダーソンの雅量

名俳優ヘンダーソンは頗る大度にして、生來曾て怒つたことがなかつた。彼がまだオクスフォードに在つた時、或る日同窓の一學生と議論を始めたが、かの學生は大に怒つて杯を取上ぐるより早くヘンダーソンの面を目懸けて投げつ

けた。

然しヘンダーソンは神色自若として、ハンケチを取出して徐ろに己が面を拭ひ、

『君、今のは横道へ外れたやうだからこれから、君の本論を承はらうじやないか。』

ゴルドン將軍花園を畑とす

ゴルドン將軍は極めて慈悲深い人であつた。或る時一人の貧民が將軍の花園を觀て、

『王侯將相は流石なものだ。斯る廣大な花畑を有するとは、吾々貧民は、掌の

やうな土地を得て耕さうと思つても、さて得ることが出來ぬ。』

と嘆息した。將軍は之を聞いて、

『汝は眞に耕地を欲するか？果して然らば余は汝の爲に花園を割くことを吝まぬであらう。』

と、遂に庭園の一隅を耕さしめた。

後、請ふものあるに任せて割き與へたので、さしも廣大なる花園は、忽ち畑と化し、靑赤の花は變じて黃なる麥となつた。

ルーテル窮客に家什を與ふ

宗教改革を以て有名なマルテイン・ルーテルの家に、祖先傳來の一枚の古金

と銀盃數個とを藏して居つた。

或る日一人の窮客がやつてきて、慈悲を乞うた。その時ルーテルは盡く右の家什を客に示して、

『君の好む物をどれなりとお選びなさい。』

『皆好む物ばかりです。』

『では皆お持ちなさい。』

かくてルーテルは家什を盡く貧者に與へて、更に吝む色もなかつた。

臣が時計は常に一時であります

一少壯士官があつた。家貧しくして時計を購ふことが出來ぬ。そこで鎖に銃

彈を括り附け、之を袋に入れて携帶して居つた。

フレデリック大王之を聽き、彼が虛飾を誡めてやらうと思はれ、演武の際、

『君の時計は幾時だ？』

と突然お問ひになると、彼の士官は素より頓才に富むものであつたから、早速例の銃彈を出して見せて、

『臣が時計は常に一時でありまして、陛下の爲に死するの時を指して居ります。』

と明瞭に對へた。大王は其答の意表に出たのを喜び、

『これを君に與へよう。』

とて、佩ぶる所の時計を賜つた。

コロンブスの夫人大業を助く

亞米利加大陸を發見して、球地は圓しとの自信を證明したコロンブスは、その大業を成すに非常に夫人の内助の力を仰いでゐる。

千四百七十年、コロンブスは未だそのリスボンに住める頃、有名なる航海家の娘フエリバを娶つた。

フエリバは父の商買柄として大洋又は遠島に航海したことがあるので、其方面の趣味と知識とを有するのみならず、また美術の方面にも趣味をもつて居つた。故に家に在る時は海圖を描き、航海日誌を認めたことも多かつたといふ。

フエリバはコロンブスに嫁ぐと同時に父の遺書の類を悉く彼に致し、且つ父から扶殖された航海趣味を以てその良人に同情し、大に彼を勵ました。

兩人がポートサイドに閑居中は、フエリバは明け暮れ夫の爲に書を讀み、共に學び、共に談りして、遂にコロンブスをして其目的に向つての奮勵心を喚起した。

コロンブスが世人から氣狂と嘲られた時に、獨り彼に眞に同情して居つたのはフエリバである。西班牙のイサベラ女王が寶玉を賣つてコロンブスの爲に巨船を購うた時と雖も、尙ほ獨り彼の爲に眞に成功を祈つて居つたのはフエリバである。

あゝ然るにこの貞實なる妻は、その夫の成功を見ずして、幾夜か西方の海空を眺め明かし、大陸發見の喜報を聞かざる前に病死したのである。

鞍匠の娘伯爵夫人となる

氏なくして玉の輿に乘るものは婦人である。むかし英國に富裕なる鞍匠があつた。その一人の娘を遺して死するとき遺言するやう、

『汝が若しわが家業を繼ぐべき鞍匠の外に夫を求めたならば、わが巨萬の遺産は悉く失はれるであらう。』

と、此に於て彼の少女は、鞍匠以外には嫁ぐまいと決心した。

然るに其頃ハリファックス伯爵ダンクといふ貴族があつて、日頃此少女に戀して居つた。けれども彼女には父の遺言があることとて、婚約の手を延ばすべき術がなかつた。戀に溺れたる伯爵は種考々慮の末、遂に意を決してその鞍屋へ弟子となつてはいり込んだ。

かくて伯爵は七年間その職を學び、一人前の鞍匠となつたので、此に始めて彼の少女を迎へて妻とした。遠大なる計畫といふべし。

珍奇なる遺言狀

千七百八十六年、英京倫敦に於て死んだ一老女は、その遺産に就て珍奇なる遺言狀を殘した。卽ち、

第一條　わが最愛の猿猴ジャッコーには、その世を終るまで、年金十ポンドを給す

第二條　わが愛犬ショック及び愛猫チッブルには、各年金五ポンドを給す

但し兩者の中、其一死したる場合には、生殘れる者へ兩者分の年金を合せて給すること

第三條　第一條及び第二條を實施したる殘餘の遺産は、悉く之をわが甥に讓與す

スキフトの奇癖

ディーン・スキフトは僕婢を取扱ふに非常に嚴格であつた。その新に僕婢を雇入るゝ時は、色々の事は之を家の執事に注意せしめたけれども、唯だ次の二箇條だけは自分で懇々と說き聽かせるのであつた。即ち、

第一條　僕婢が主人の室に入る時は必ず戸を閉ざすこと

第二條　僕婢が主人の室へ入つて出る時は必ず戸を閉ざすこと

頗る論理的の條件である。

一日その女中がスキフトの部屋へやつてきて、

今日は妹の婚禮でございますから、一日お暇をいただきたうございますが？』

と請うたので、彼は、

『あゝよし〳〵、馬を貸してやるから乘つてゆくがよい。』

と快諾した。そこで女中は餘りの嬉しさにそこ〳〵に部屋を出て、戸を閉づるのを忘れてしまつた。

此に於てスキフトは女中が禁戒第二條に牴觸したのを見出し、大に怒つて、

女中の出て行つた後すでに十四五分間も經てゐるに拘らず、急に下男をして彼女を途中から呼び返さしめた。

女中は、

『どんな急用が出來たのかしらん？』

と、急ぎ歸つて、主人の前に跪き、

『ご用とは國事でございますか？』

『その戸を閉ぢて……』

マコーレーの强記

マコーレーの記憶力の强いことは驚くばかりであつた。殊に詩句及び作話などを好んで暗記した。而て一度讀めば精確に之を記憶するのみならず、書物を一瞥したばかりでその意義を會得した。

曾てマコーレーは人に向つて語るやう、

『若し不幸にして災難にあひ、たとへミルトンの『失樂園』やバンヤンの『巡禮旅行』などの原稿を失ふとも、余が頭さへあれば大丈夫記憶してゐる。』

と。その自信の强いことも亦た驚くべきである。

小哲學先生ベンザム

ミルと共に功利主義の論理說を主張したベンザムは、幼より穎悟絕倫の人であつた。

彼は平生好んでラビンの『英國史』を讀み、五歳の時には早くも圖書館にはいつて群書を渉獵し、小理屈をこねまはした。時には大人先生をさへ口を噤はしむることが往々あつた。故に家人はベンザムを指して、『哲學先生』と綽名して居つたといふ。

ベンザム出藍の譽ありのり

ベンザムが未だ大學に在つた頃、その學校では當時空前絶後といはれたる法學大家ブラックストーンの英法講座があつた。そこでベンザムは常にその聽講に出かけた。然るに他の學生は皆餘念なく筆記をなし、咳拂ひの聲一つでも逸すまいとの狀況を示して居つたに係らず、ベンザムは獨り筆を擱いて書かうともせず、沈思熟考して居たので、友人は之を怪み問うて、

『なぜ君は考へてばかり居て筆記しないのか？』

ベンザム、

『予は講義を聽けば、聽いただけに就て批判を下さなければ氣がすまぬ。且つ先生の說の中には餘り感服しないところが多い。それで予の胸の裏は是非の判定に忙はしくて筆記する暇などありはしない。』

將來ベンザムがカントなどの行爲の動機を重んずる倫理說に對して別に行爲の結果を重んずる所の功利說を唱へ、別に一新機軸を出したのは、藍より出でて藍よりもなほ色濃きものといふべきである。

部將柩をネルソンに贈る

アポルギルの海戰は、ネルソン畢生の大激戰にして、敵艦多數を捕獲して歐洲全土を震駭せしめた。

此海戰にネルソンは彈丸に中つて昏絶し、數分間の後漸く蘇生した。後、ネルソンは畫工に命じて其狀を描かしめ、之を自分の居間に掲げて、以て來客に誇示した。

時にネルソンの部將にハローウエルといふ人があつた。この人はアポルギルの海戰に勇名を顯したものであるが、ネルソンの右の話を聞き、自ら佛將ブルイスの乘艦たるオリイント號の艦材を以て一の柩を造り、之をネルソンに贈つ

ていふやう、

『近頃承りますると將軍には曾てアポルギルに於ける閣下の死狀を書いて居室に掲げられたさうでございますが、千古の快擧と存じまする。就ては只今私が佛艦の艦材で造りました棺を呈上致しまするから、將軍百歳の後この中に御遺骸を藏めらるれば、一しほの快事かと存じまする。』

ネルソン乃ち大に喜び、常に其柩を左右に置いて愛玩した。

ナポレオン彈丸を買ふ

ナポレオン第一世がアクルを攻むるとき、彈丸が缺乏したので、大に當惑した。

そこでナポレオンは一の僞計を設け、騎兵や駄馬を海岸に出し、英國の砲艦に向つて戰を挑ませた。而て令して曰く、

『一個の彈丸は本營に於て五錢に買上げる。』

此に於て兵士等は爭つて英艦から發射した彈丸を拾ひ集め、悉く本營へ屆けた。爲に一時その缺乏を充し得たといふ。

健忘症に罹れるラ・フオンテーヌ

佛國の有名なる詩人兼小說家たるラ・フオンテーヌは、よく物を忘れる人であつた。

曾て彼は一友人の喪に會ひ、その葬式をすました。これまではよかつたが、

數日を經て彼は何心なく右の友人を訪問して、

『今日はお宅ですか？』

家人は餘りのこととは思ひながら、

『數日前亡くなりましてございます。』

ラ・フオンテーヌは之を聞いて非常に驚いた樣子であつたが、漸く我に返り、

『なある程さうでした。さう仰つしやれば私もお葬式に參りました。』

とは餘りの健忘家といふべし。

人爵何物ぞ

獨逸の詩人スラルは、詩に巧なるを以て貴族に列せられた。文筆を以て華族

の列に入れらるゝことは非常の榮譽である。然るにスラルは些かも喜べる色なく、その辭令書を受取つたまゝ、曾て一度も爵位を稱したこともなければ、親戚友人にさへ通知しなかつた。故に誰あつてスラルが華族に列せられたと知る者はなかつた。

一日、氏の友人が來訪した。そこで彼は友人に近作の詩を示さうとて、堆積せる草稿をひきくり返して探すうち、ふと華族に列せられた時の辭令書が出た。そこで彼は、

『予が華族の辭令書を持つてゐることは恐らく君も知るまい。』

と、ちよつと手に取り能くも示さず直ちに草稿の中に投じ、餘念もなく近作の詩を搜したといふ。その志や高く、その着眼や尙しといふべし。

詩人マトラルの恬淡

獨逸の詩人マトラルは、赤貧洗ふが如き中に在つて、恬淡無慾平然としてその道を樂んだ。

一夜、友人が彼を招いて晩餐を饗したが、何時に變らぬ彼の貧乏を憐み、どうかして彼が急を救はうと思つたけれども、

『面前にて金錢や物品を惠んだとて、廉潔なる彼は受取りはすまい。』

と考へたので、密に三百圓許の紙幣を彼の袖の中に入れて置いた。

かくて彼は家に歸り、翌朝何氣なく袖に手をさし入れてみると、紙包があつた。そこで何だらうと披いてみると三百圓ばかり包んであつた。

『さては友人の心附だな。』
と氣附いたので、直ちに之を返し、且つ、
『以來斯る不敬をしてくれては困る』
と、嚴重に謝絶した。之れを傳へ聞いた人々は皆マトラルの無欲に感じたといふ。

トーマス・モアーの返禮

英國にトーマス・モアーといふ名判官があつた。或時一裁判事件が持ち上つたが、原告の方が不正であつた。然し權門であつたので、賄賂を以てモアーを取込み、以て勝利を得ようとして二個の銀瓶を賂つた。

此に於てモアーは大に憤り、直ちにそれに美酒を盛り、之を原告に返して、
『敢て恭々しく貴賚に酬い申さう。』
と言つたので、原告は羞伏してしまつた。

暗殺狀机上に堆積す

米國の名大統領リンコルンは、その大統領當選の日より、脅喝暗殺の狀に接せぬ日とてはなかつた。そこで彼は毎日その暗殺狀を錐に挿して保存して置いたところが、机上に小丘を築いた。そこでリンコルンは一日友人に向つて、
『此中初めの二三のみは少しく不愉快であつたけれども、その後に來たのは平常の音信と同じであつた。』

と語つたといふ。その剛膽思ふべく、また多くの暗殺狀の單に脅喝に過ぎぬことに一驚を吃する。

スカウト機敏を以て勝つ

スカウトといふ人は米國政府の爲に險を冒して亞米利加土人の動靜を搜つた人である。彼はその職業柄時には隨分決鬪もやるし、冒險の逸雄であつた。

一日、スカウトは居酒屋に於て仲間と口論し、眉間へピストルを差しつけられた。然し彼は少しも驚かず、

『いくぢのない野郎だ、ウイスキー一杯で醉ぱらつたのか、よく見てみろ！彈丸がはいつてるか。』

と、泰然としてゐるので、相手は敵の餘り平氣でゐるので、若しやと思ひ銃先を下ぐる、此時遲し彼の時早し、彼は手早く己のピストルを差しつけたので、相手はしりごみをして逃出した。

ソロン富貴を以て幸福とせず

憲法を以て有名なるアテネの大賢ソロンは、一日、リヂヤ王に召されて參內した。王乃ち彼を導いて金殿玉樓を遍く巡視せしめ、その華麗なるを誇つて、而て後問うて曰く、

『夫子の見る所では誰を最も幸福とするか？』

ソロン對へて、

『臣が友人にセリウスといふ者がございました。アテネに住し、廉潔篤行にして終生清貧に安じ、優遊以て國土の繁榮を樂んで居りましたが、後、國難に殉しました。その子孫また德行あつて、世人に尊崇されて居りまする。思ひまするにこのセリウスほど幸福の者はございますまい。』

王はソロンが必ず王自身を最幸禮の人といふであらうと思つて居つたところが圖らずも他の人を以て對へたので、呆然自失した。頃くあつてまた問うて、

『然らばセリウスに次ぐ者は誰であると思ふか？』

ソロンは猶ほ王のことを言はず、孝子二人を擧げたから、王は遂に耐へかねて、

『夫子は朕を以てセリウスに若かずとなすのか?!』

ソロン徐ろに對へて、

『陛下は富貴世を極めて今日に至られました。然し富貴は未だ以て眞の幸福となすに足りませぬ。それ豫め計るべからざるは人世の榮枯でございます。陛下百歳の後は如何して不測のことなしと申されませう。』

王は悅びずして止んだ。

後、王はペルシャに擒にせられ、王位を奪つて奴隷とせられたから、此に至つて始めてソロンとの物語を追懷して、

『あゝソロンの言は眞理である。』

と嘆いた。

グラント將軍始めて怒る

米國の名將にして且つ大統領であつたグラント將軍は、温厚篤實の君子にして、曾て一度も怒を色に現したことがなかつた。

然るに將軍は一日郊外を散歩して、偶々一兵卒が疲れた馬に重荷を負はせ、鞭にて亂打しながら險阪を登るを見て、始めて彼の不仁を怒つた。

然し將軍は敢て之を色に現すことなく、唯だ車の後を推してやつただけであつた。

予は大將軍なるぞ

米國獨立戰爭に際し、陣營を張つて米軍が休んでゐる時、總大將ワシントンは、陣營の秩序を取締る爲に見廻つた。

然るに偶々一軍曹が、二人の兵卒を拔劍にて叱しながら、大なる材木を積ませて居るのに出會つた。勿より大木のこととて、二人の兵士は眼が飛出んばかりに力を入れるけれども、木は少しも動かぬ。すると軍曹は手傳しようともせで、

『早くその材木を積まぬかッ！なんといふ弱虫だらう。』

と、連りに叱咤して居る。

ワシントンは之を見て、勃然として軍曹の暴慢を憤り、且つ哀然として兵卒の悄然たるを憐み、つか〳〵と寄つて來て、自ら手傳つて其材木を積み上げ、

やがて軍曹に向つて、

『そんなに部下を叱るものではない。君も加勢したらどうか。』

その日ワシントンは軍服の上に黒い外套を被つて居つたので、軍曹は大將軍とは露知らず、怒りの眼を見張つて、

『默れッ！　他人に差出口をすると可かぬぞッ！　おれを誰れと思ふ、軍曹だぞッ！』

ワシントンは、

『おん身の軍曹たることは承知して居る。』

と、徐ろに外套の釦をはづしながら、

『予は大將軍なるぞッ！』

と、燦然たる軍服を示したので、軍曹殿は一縮みに縮み上つて言葉もなく、色青ざめて挽れた。そこでワシントンは、

『部下を愛しなければいかぬ。戰爭の功は部下の力があるから之を收め得るのである。』

と、懇々と諭したので、軍曹は過を謝して退いた。

リンコルン豚を捨てず

正義の爲に一命を捧げ、南北戰端を開いて南方を抑へかくて、幾萬の奴隷を開放したる米國大統領リンコルンは、ワシントンと共に國の父と呼ばれた人であるが、その成後の義俠心は、少時既に現れてゐたのである。

一日リンコルンは母の用を足して近村へと出かけた。急用であつたから駈足で歩いてゐると、途中に於て、泥濘の中に一匹の仔豚の陥つて頻りに助けを乞うてゐるのに出會つた。けれどもリンコルンは急用であるから、さつさと駈けて通り過ぎてしまつた。

彼は駈けながらも、

『今の豚の兒は可愛想だな、助けてやるとよかつた。然し母の用で時間を潰してはならぬ。』

と思ひつづけて居つたが、彼の義俠なる心は如何にしても仔豚を見捨つることが出來なかつた。そこで約半里も行つてから、突然踵を回して、泥濘の方へと引返し、やがて仔豚を助けて、再び用事ある村の方へと急いだといふ。

フオシヨン國を怨みず

アテネの名士フオシヨンは、寃罪によつて流竄せられ、謫所に病死せんとするや、その遺言に曰く、

『希くは吾が兒に傳へられよ。夫れ國は國たらざるも民は民たらねばならぬ。汝鞠躬國に盡すこと、敢て乃父に劣る勿れ、吾の流竄されたのは天である。決して國を怨んではならぬと。』

老婆鐵拳を帝王に加ふ

サクソニア王アルフレッドは、デンスといふ凶惡なる種族に領國を奪はれ、

四方を漂浪して頗る艱苦を嘗めた。

或時王は麵麭屋の雇人となつた。或る日、主人たる婆さんは外出しようと思つて、

『お前よく爐の麵麭を番してるのだよ、油斷してはいけないよ。』

と、王に番を託して出た。王は則ち釜の邊に坐して見張つて居つたが、奮業恢復の念油然として起り、國を思ひ身の行末を憂へ、萬感一時に簇つて、暫し茫然として居つた。

其時婆さんは外から歸つて來て、爐上を見ると、麵麭は眞黑に焦げてゐた。そこで大に怒り、

『なまけ者め、汝は麵麭を食ふ口を持ちながら、燒案排を觀る眼を持たぬのか

ッ！』

と、拳を固めて王の頭をポカーンとなぐりつけた。王は擲られて吃驚して始めて我に返り、

『これはどうも惡うございました。麥粉の代を差上げますから如何かご勘辨を願ひます。』

婆さんは益々怒つて、

『咄、無錢奴、汝に麥粉の代があるか、馬鹿ッ！』

折しも破れんばかりに戸を打叩き、

『わが王は玆に在らせられまするか?!』

と、ドヤ〳〵と亂入した數多の忠臣、等しく王の前に跪くを見て、婆さんは初

めてそのサクソニヤ王たることを知り、直ちに王の足下に身を投じ、涙を流して不敬を謝した。王は靜に之を制して、

『汝に罪はないのだから、あやまる理由はない。』

と、遂に若干の麥粉代を與へてその損失を謝した。

庶幾くはケートの娘たるに恥ぢざらん

羅馬の哲學者ケートの娘にポルシアといふものがあつた。性質温恭にして學藝に長じ、勇氣ありて、婦德を備へて居た。長じて愛匿者ブルタスの妻となつた。ブルタスは議會に於てシーザーを刺殺した人である。

曾て自ら苦痛に耐へ得るや否やを試みるため、股を刺したことがある。夫ブ

ルタスは之を怪み、其故を問うと、ポルシアは、

『妾は既に君と室を共にすることが出來ましたから、此上は君と辛苦を分つの勇氣を有したいと思つてでございます。』

晩年ブルタスの戰に敗れて自殺するや、敵も味方もポルシア夫人の賢德を稱し、その死を止める爲に一切の刃物を隱したけれども、彼女は豫て夫と死を共にせんとの覺悟を有して居たので、

『庶幾くはケートの娘たるに恥づまい。』

とて、炎々たる炭火を呑んで自殺した。

ロベルト第一世蜘蛛の勇氣に感奮す

英國スコットランド王ロベルト第一世が、まだカルリック侯たりし時、スコットランド兵がイングランド兵の爲に打破られたので、侯は力を盡してイングランド兵に反抗した。そこで敵兵は怒つて、侯を執へて、殺さうとした。故に侯は潛行して山野に走り、敵兵の難を避けた。

一夜、侯は片田舍のあばら屋に宿し、一把の藁を敷いて臥した。然しながら夜もすがら來し方行く末を案じ、恢復の方略を思ひわづらつて、一睡だもしなかつた。

夜は千思萬感のうちに明けようとして、東方の少しく白む頃、不圖天井を仰

いで見ると、一匹の小蜘蛛が己れの糸に懸り、其身を左右に搖り動かしながら勢に乘じて家の椽に達しようと企てた。侯は之を見て、暗にその成功を冀ひ、

『どうするだらう?』

と見てゐると、蜘蛛は全力を注いで達せんと努むること前後十三回に及び、而も悉く失敗に終つた。けれども之に屈することなく、益々勇を鼓して、十四回目に辛うじてその椽に達するを得た。侯は此に於てハツタと膝を叩き、

『曉つた〳〵、忍耐能く大事を成就す。』

と、奮然としてその廢屋を出た。

是より侯のイングランド兵に反抗すること益々堅く、更に兵を募つて遂に敵

を擊破し　一千三百〇六年スコットランド王の位に即いた。

盲人ヘルショッフ造船家となる

米國ロードアイランド州に生れたジョン・ヘルショッフは僅か十五歳にして明を失した。然し盲人の身を以て刻苦精勵し、遂に造船家となつたが、彼が造つた競舟は、その船足の早いことに於て當時世界に名を轟かした。ヘレン・ケラー女史と共に最も驚くべき盲人の一である。

ヒューム無神論に崇らる

英國の哲學者ヒュームは、ロックと併稱された經驗派の學者にして、また無

神論者であつた。

一日、ヒュームはエヂンバラの新舊兩市を連接せる假橋を通行してゐる際、不幸にして橋が落ちたので、彼はザンブとばかり水中に陷り、

『助けてくれ！助けてくれッ！』

と聲を限りに呼ばはつてゐると、聲を聞いて先づ駈けつけたのは一人の老婦人であつた。然るに此婦人は、水中に溺れてゐるのはヒュームであると知り、

『御身は無神論者だから、妾の助くる限ではありませぬ。』

と、寄りもつかなかつた。ヒュームは命の瀨戸を泳ぎながら、

『否、否、否、余は決して無神論者ではない。それは貴女の誤解です。』

と絶叫した。婦人はヒュームを河に泳がせたまゝ、

『然らば御身の信仰を承りたい。それが出來ないなら、無神論者といはれても仕方ありますまい。』

ヒユームは此婦人より外に救ふてくれる人もないので、進退維れ谷まり。已むなく徒弟の戒條を唱へた。そこで婦人は大に滿足し、則ちヒユームを水中より救ひ上げた。

死期を知つて自ら火葬す

印度古代の遊行哲學者の一人たるカラナスは、八十三歳の時病に侵され、日々に病勢が募つたので、心の中に思ふやう、

『これではとても恢復の見込はあるまい。此上は一時も早く死んで苦痛の期を

短くする外ない。』

と、弟子に命じて薪を積上げさせ、自らはその上に登つて覺悟の體を示し、その薪に火をつけさせた。

其頃歴山大王はカラナスの信者であつたから、彼が燒死を覺悟したと聞き、取るものも取りあへず其場に駈けつけて、

『先生には何たることでありませう。今暫く其儀はお思ひ止りを願ひまする。』

と切に止めたけれども、彼の決心は鐵石の如く、頑として變じなかつた。殊に火勢は漸く盛んとなつてくるので、大王は涙ながらに、

『何か遺言はございませぬか？』

『否。』

大王が頻りに名殘を惜むので、カラナスは笑ひながら、

『さのみ悲み給うな、陛下を地下に拜するの日も亦た遠・はありますまい。』

果して其後數箇月にして、歴山大王はバビロンに於て俄かに崩せられた。

髭を剃らずして債鬼を逐ふ

サイン・フオイキといふ詩人があつて、曾て猶太人から二百金を借りた。けれどもと清貧なる彼は之を返すべきの道なく、長らく言を左右に托して拂はずにゐたが、一日、理髪店に於て髭を剃らうと、石鹸をすり附けてゐる所に、突然債鬼に襲撃された。債鬼は好機逸すべからずと、

『是非拂つて下さい。當方も非常に困つてゐるのですから。』

と、極めて嚴酷に請求した。理髪師も側から聞いてゐて非常に氣の毒に思ひ、

『旦那が髭を剃られるまで待つて下さい。』

と仲裁した。そこで債鬼も、

『然らば髭を剃られるまでは猶豫しよう。』

と許諾した。詩人はすかさず、

『髭を剃るまでは屹度待つてくれますね！』

と念を押しながら、更に理髪師に向ひ、

『君は確かに證人だぞ！』

と、髭を剃らずして、直ちに起つて出て行つてしまつた。

皇帝と下士との相乘り

墺太利皇帝ヨセフ第二世は、平生單身馬に乘つてウイーンナの郊外を散策するのを例とせられた。

一日、帝は例の如く馬車を驅つて郊外を散歩して居られると、驟雨忽ち來り宛も篠を束ねたる如く、沛然として降つた。時に遙かの彼方から一人の下士が駈けて來て、馬車の中に何人あるかを窺ふの暇なく、

『少々お願であります。どうか御迷惑でもありませうが馬車の一端を拜借させて下さい。實は今日始めて着た新調の洋服が濡れますから』

と叫んだ。馬車の中から聲があつて、

『君が軍服を愛する爲ならば承諾しよう。が、君は何處から來たのか？』

『余は同僚の守衛所から歸つたのであります、今朝あちらで結構な朝食を御馳走になりまして。』

『さうか。してその結構なものとは何んな食物か？』

『あてゝごらんなさい。』

『拙者がそれを中て得る道理はないが、判斷も一興と思ふからあてゝ見よう。……スープとビールか?!』

『それよりもまだ構結なもの……。』

『シュクルートか?!』

『まだ結構なもの……。』

『然らば犢の股か?!』
『まだ〳〵……。』
『では拙者には判斷出來ぬ。』
下士は進んで主人の膝を拍つて、
『結構なものとは雉……辱けなくも陛下の御遊獵にて獲給うたものでありますから、實に結構でありませう。』
かくて馬車を驅つて市中に入ると、馬車の主公は、
『君の家まで送つてやらう。所は?』
『いや、それには及びませぬ。甚だ御厄介に預りました。紀念のためどうか貴官の御姓名を承りたいのでありますが?』

馬車の主人は笑つて、
『今度は君の番だ、試みに判斷して見給へ?!』
下士、
『君は陸軍でゐらせられますか?!』
『然り。』
『下士官でありませう?!』
『それよりもまだ結構なもの……。』
『陸軍大尉?!』
『まだ結構なもの……。』
『佐官?!』

『まだ結構なもの……。』
『然らば將官でありますか?!』
『まだ〳〵……。』
『では皇帝陛下の外はありますまい。』
此時馬車の主人は、徐ろに外套の釦を外づしてその軍服を示しながら、
『然り。汝に結構な雉を食はした陛下である。』
此に於て下士は遽かに青くなつて、驚き懼れ、心亂れ魂飛び、車内に跪かんばかりにして不敬の罪を謝し、
『御車を駐めさせられて、どうか臣を降して下さいまするやう。』
皇帝は微笑されて、

『否、否。汝をして陛下の雉を食ひ且つ陛下に送り屆けられたとの誇りを得しめよう。』
とて、遂にその下士を住所まで送られたといふ。

チエールとビスマルクの談判

寛猛相濟すとは實にビスマルクの謂か。此逸話は實に吾人をして偉人の胸中の大なるを窺知せしめ得るものである。
むかし普國の軍勝に乘じて佛軍を巴里に圍み、城下の盟をなさしめた。其媾和談判に立會つたのは普國の側は有名なる鐵血宰相ビスマルク、佛軍の方はチエールであつた。

普國側は名を五洲に轟かしたビスマルクを出し、佛國側は國家の存亡を一身に荷へるチエールを出したこととて、互に國家の面目を輝かさう墜すまじと、論爭精到、其間實に一髪を容るるの隙さへなかつた。

一日、兩人は又激論に時を移したが、チエールは日夜巴里の孤城中に在つて肺肝を碎き、今また國步艱難の衝に當つて論戰數刻に及んだこととて、流石の鐵腸も疲勞を感じ、身は敵國委員と樽俎の間にありながら、覺えず睡りを催し、泛々忽ち華胥の國に遊んだ。

暫くあつて不圖目を覺せば、其身には何時の間にか厚紙が懸つて、柱時計の下に只一人ビスマルクが端然として坐してゐた。チエールの豪膽、ビスマルクの寛大、實に双方の華といふべきか。

夫婦の入隊

ナポレオン第一世が千八百六年の末、パリに於て陸軍の大檢閲を行つた際、第六輕騎隊を閲したところ、隊外にあつて輪乘せる一騎兵があつた。そこで帝は之を見て忽ち令して、

『かの輕騎は擅に其列を離れてゐる、不都合である。入日の拘留に處せよ。』

時に側に侍した輕騎隊の大佐は、進み寄つて、

『陛下よ、何卒臣に志願兵の情願を許されよ。かの輕騎を閲し給はば、事情明白となりませう。』

帝は然らばとてかの輕騎を召して、

『汝の姓名は何といふ?』
『ブレートンデウーブルと申します。』
『汝は何故に列を離れてゐるか?』
『臣は曾て一度も隊列に加はつたことがございませぬ。ただ志願兵として隊に從ふのみでございます。』
『汝は此隊に屬してから何年になるか?』
『八年になりまする。』
『何故にかく久しく兵役に服するか?』
『ただ一片の愛國心と夫を想ふの至情とのみ。』
帝は此語を聞き、驚いて、

『あゝ汝は女子か?!』
『左樣でございます。臣はただ一臂の力を呵して陛下に忠を致さうと冀つてゐるのみでございます。』
『汝の夫は何と呼ぶか?』
『ホンセーと申し、陸軍軍曹でございます。』
『汝には子があるか?』
『男が一人ございます。第十一龍騎隊の喇叭卒を勤めて居りまする。』
『汝は練兵を善くするか?』
『善く致します。且つ操槍法も學びました。』
帝は此に至つて大に感じ、

『然らば朕之を觀よう。』

とて、大佐に命じて彼女を隊列に入らしめ、號令を發してその技を試みた。然るに彼女の馬を馭するさま、宛として人馬一體の如く、一進一退自由自在にして、勇偉の氣象が充ち滿ちて居つたので、帝は更に感嘆し、

『汝を軍曹に任じよう。仍つて汝はその服裝を改めて聯隊に屬せよ。朕再び之を觀るであらう。』

それより夫妻共に軍に從ひ、普佛戰爭にエイローに戰つて大功を奏し、金賞を賜つた。後またフリートランドの戰にも勇戰して、遂に腕下と股とに傷を被つた。そこで帝は彼女の忠勇を賞し、親ら佩ぶる所の勳章を外して之に賜はつた。

ルイ・ナポレオンの抱負

ルイ・ナポレオンが佛國に捕へられて終身禁錮の宣告を受くるや、一友人は書を致してその憂憤を慰めた。然るにナポレオンは直ちに返事を送つて曰く、

『この獄舍に繫がれてゐるのは余の分である。若し世に出でて大國の全權を握ることが出來なければ、寧ろ獄中に終らう。』

と。その抱負の大なるを見るべし。

ゼルマン皇帝婦女の計に欺かる

バワリヤ公ゲルフが、ゼルマン皇帝コンラット第三世の爲にウエノンスバー

ク城に圍まれたとき、奮戰の甲斐なく遂に敵に向つて降旗を揭げた。

そこで公は使節を皇帝の陣中に送つて開城の條約を締結させた。然るに帝の待遇極めて厚く、使節に向つて、

『公をして其兵を率ゐて余が陣中を通過することを許す。余は決して害を加へることはない。』

と言つた。然るに公の夫人は之を信ぜず、更に使を遣して、

『城中の婦人には盡く路引を給し、且つ婦人が自ら携帶すべき所有物は、隨意に帶出することを許されよ。』

と申送つた。帝は異議なく之を承諾した。

さて愈々期日になると、ゼルマン軍は城中の婦人の退城を見ようと、萬目一

線、今や出づると、凝視して居つた。然るに豈に圖らんや、婦人等は各其夫を抱き或は負ひ、陸續々として出て來たので、敵は一同コレハ〳〵とばかり互に顏見合せて呆然として居た。

ゼルマン皇帝は殆め、

『所謂婦人が自ら携帶すべき所有物とは、必ずや金銀珠玉の類であらう。』

と、想像して居つたので、そこでその自由携帶を許したのであつた。が、此に至つて初めて婦女子の計中に陷つたのを覺つたけれども、婦女子等の眞實にして材幹あるを感じ、害を加ふることなく退城せしめた。

片腕を夫人に送る

英國の華族へスティングス・ロードンは、和蘭の役に從つて功を立て、砲兵總長に擧げられた。平生深くその夫人を愛し、夫婦の情極めて親密であつた。

千八百二十五年バイカ灣の戰に討死したが、その臨終に、自分の右手を切斷し、

『夫人の死するときこの片腕も共に棺中に納めるように國許へ傳へてくれ。』

と遺言した。

ナポレオン己の心臓を送る

英雄實に多情多恨といふべきか。ナポレオン第一世の將に死せんとするや、侍醫アントマルシに向つて、遺言を託するやう、

『余が死んだらば、汝は余が體を解剖して心臓を抉出し、之をアルコホルに浸して、バルマに在る余が最愛の妻、マリー・イザに贈つてくれよ。而て彼女に余が彼女を愛慕すること實に深くして、一時も彼女を忘れなかつたと告げ、また汝が目擊した所を彼女に告げてくれ。』

アダム、イヴは君が遠祖

チエズター・フイールド卿の親戚に、スタンホープといふ人があつた。その人の奇癖ともいふべきは、大の系圖自慢である。彼は人と會する毎にその系圖

を說き、數百年の昔に溯つて、余が家からは斯々の將軍を出した。かの有名なる宰相は余が家の分派から出た人であるなどと、滔々として家系を演べ立てた。恰も何々天皇の皇子何々親王に十三代の末裔何の某まではよいが、その家臣何の某生年十八歳などといふ式であつた。

一日、フイールド卿は倫敦を散歩しての歸るさ、とある繪草紙に於て人祖アダム、イヴが、樂園に逍遙してゐる古畫を見出し、數錢を投じて之を購ひ、その上部に、

『スタンホープ・アダム、及び妻スタンホープ・イヴ。』

と大書し、之をスタンホープに贈つて曰く、

『これは貴重なる君が遠祖である。』

詩人シエレー一婦人を幽靈と見る

シエレーは英國の有名なる詩人である。バイロンと友情密にして、兄弟も嘗ならぬ仲であつた。

一日、彼はバイロンと共に舟を大海に泛べたが、俄かに風波荒れて、船は一上一下恰も木葉の風に弄ばるゝが如く、殆ど覆へらうとした。シエレーは別に游泳も出來ないけれども、生來剛膽なる人間として、神色自若として居つた。

然るに、この剛膽なる詩人も、時には臆病になると見えて、嘗て二三の貴婦人とバイロン卿の宅に會し、四方山の話の末、談話は偶々怪談に移つた。之を聽くにつけ、シエレーの顏色は次第に青くなつて、終には其場に居たたまらず

して退室した。

外の人々は驚いて、

『急に氣分でも惡くなつたのであらう。』

と、次室にいつて見ると、シエレーは其中の一婦人を見るや否や、遽てて戸棚の中へ隱れようとしたが、隱れおほせず、一聲、

『アッ！』

と叫んで氣絶した。

一同は益々驚いて、醫師よ藥よと騷ぐうちに、シエレーは漸く正氣に復した。而て語るやう、

『予は生れてから今日の如く不覺を取つたことはない。實は先刻怪談を聽きな

がら、心中に不圖兩目の幽靈の姿を思ひ浮べたが、何時の間にか、此に居給ふ貴婦人の胸に兩目があるやうに思はれて、どれ程氣を取り直さうとしても、どうしても取り直すことが出來ぬ。兎角する間に恐くて〳〵たまらぬので、遂に只今の仕末となつた。』

詩人の想像力は頗る鋭敏にして而も活々としてゐると見える。

奈翁は案外小心者なり

ナポレオン第一世は全歐洲を蹂躙した程の英雄であるから、定めし鬼神をも辟易させる位に磊落不羈の人であつたらうと思はれるけれども、案外身なりなどに氣を遣ふ小心家であつた。殊に其樣子には最も注意を拂ひ、俳優タルマと

いふ者を側に置き、常に樣子の師匠とした。而て常に少年を誡めて、
『少年たる者は夙にその態度に就て教師に接しなければならぬ。』
と言つたといふ。

馬鈴薯の決闘

米國にバウマンと呼んで、ケンタッキー州地方を遍歴せる牧師があつた。彼は筋骨が頗る逞しかつた。

或時バウマンはケンタッキーにて宗教上の會を開き、說教の序でに其地方にて有名なる無賴漢某を攻擊した。然るに其男は之を聽いて大に怒り、遂に決闘を申込んだ。

バウマンは之を知らぬふりで通さうと思つたけれども、其頃其地方では一般に決闘が流行して居つたので、今更之を否まば卑怯者と笑はれるであらうと、とかく思案にくれて居た。が、やがて氏は此に一計を案出した。といふのは、元來決闘を申込まれた時は、武器を自分で選擇するの特權を有するものである。そこで氏は此特權を利用して、某に約束するやう、
『決闘のお申込みに就ては委細承知致した。但し武器としては互に馬鈴薯半籠を携ふべきこと。』
某は、
『己れ、人を愚弄するにも程がある。』
と憤つてはみたが、何分先方の特權とあれば致方がない。そこで某も、

『委細承知。』

と應諾した。

決闘の日とはなつた。場所は都府の郊外、介添人は双方を左右に分け、各半籠の馬鈴薯を以て身を固めさせた。合圖と同時に、バウマンは先づ一個の馬鈴薯を取り上げ、敵を目がけて投げつけた。すると狙は外れずして薯丸は某の胸に中り、散々に砕けた。見物は拍手喝采して暫し鳴りも止まず、某が投げた薯は空しくあらぬ方へと飛んだ。

かくて互に四五回の襲撃を試みたが、氏の薯丸は毎發某の頭となく腹となく命中して、その度毎に群衆は、

『ヤンヤ〳〵。』

と喝采した。然し某のは常に狙外れて空を撃つた。最後に某は六發を受けて最早苦痛に堪ふる能はず、草原に倒れて、

『勝負はついた、許せッ！』

と呼び、群衆はまたも歡聲を擧げた。

やがて某は人々に扶けられて家に歸り、數日病床に臥して居つたが、その癒えて人中に出づるや、世人は皆某を賤んで共に語るものさへなくなつた。

これより後ケンタッキー州に於ては決闘が跡を絶つたといふ。それにしても該州決闘史の最後を飾るべきものが馬鈴薯の仕合とあつては、滑稽極まるものといふべく、バウマン氏亦た奇を好むの人といふべきか。

名優アーヴイングの收入

我國に於ては團十郎が一興行に五千圓を取つたといふので驚いてゐるが、英國の名優アーヴイングは、米國に渡航して興行二十八週間に亘り、その間に六十萬弗を收めたといふ。わが約百二十萬圓に當る。驚くべきではないか。

ウエリントン軍中に眠る

ヲーターローの戰に、英將ウエリントンは諸將校に戰略を授け了るや、傍らなる一士官を顧みて、

『開戰までには想ふに尙ほ十分間の暇があらう。その間予は一睡して英氣を養

ふから、時間が來たら起してくれ給へ。』

と、身を椅子に横へるや否や、鼾聲雷の如くに轟いた。

ネルソン戰酣なるに封蠟を尋ぬ

丁抹の役に、英國水師提督ネルソンは、大に敵兵を破り、勝敗の數既に決したので、

『この後兵を交ゆるに於ては徒に人命を損ずるのみであるから、一つ休戰を謀らう。』

と、すら〳〵と一書を認めた。而て之を封ずるに當り、侍者に向つて、

『封蠟を持つて來い。』

と命じたので、侍者は之を得ようとして丸に中つて斃れた。そこで更に一人に之を命じた。その者は。

『閣下の卓上に糊があるではございませぬか?!』

『封蠟でなけりやいかぬ!』

因つて封蠟をみつけて渡した。そこでネルソンは書を封じて丁抹國の皇太子に送つた。侍者は深く之を怪んで、

『この劇戰に當り閣下は何でそんな細事にお心を勞せられまするか?』

ネルソン從容として、

『糊を用ゐると、この書が敵に達した時尙ほ濡れてゐるであらう。然る時は皇太子は、ネルソンは急遽已むを得ずして此策に出でたのであらうと怪むであら

う。故に予は故らに封蠟を擇んだのである。』

と談り聽かせたので、人皆その大度にして事に當つて用意周到なるに感じた。

學生軍ガリバルヂーの敗戰を援く

溢るゝばかりの愛國心と燃ゆるが如き義俠心とを以て、造次顚沛にも一意伊太利の獨立を圖つたガリバルヂー將軍が、佛將オーデノーと、ピラマーシネに戰ふや、衆寡敵せず、今や大敗軍と見えた。

此に俄かに敵の横合より、數千の大學生馬蹄をあつめて殺到し、勝誇つたる佛軍中に面も振らず斬つて入り、遂にガリバルヂーを援けて佛兵を散々に破つた。

泰西洵に大學の數に富む。また大學生といふものも甚だ多い。然し未だ曾てこの伊太利大學の如く好名を史上に留めた者はない。

英將ナピール陣中に奇術師を試む

英將ナピールが印度駐屯中、一の有名なる奇術師がその陣中にやつて來て、諸將校の前でその妙技を演じた。どれも〳〵甚だ見事なる中に、特に一個の橙子を小僧の手中に置き、大喝一聲、劍を揮つて二つに斬るのがあつた。ナピールは不思議に思ひながらも、

『これは二人が密かに申合せて置いて人目を迷はせるのであらう。どう考へても掌上の小物を兩斷するに、その手を傷けぬことはない筈。スコットの小說にも之に類することがあるけれども、信じ難い。』

と考へたので、自ら右手を伸してその上に橙を上げ、

『さあ之を斬つてごらん。』

と言つた。奇術師は暫く其手を熟視して居つたが、

『どうも私には出來ませぬ。』

ナピール、

『さうだらう、予も亦た君には出來ぬだらうと考へて居つた。』

奇術師、

『然らばどうか左手をお見せ下さい。』

と、これをまた熟視して居つたが、やがて容を改めて、

『左手ならば出來ませう。閣下堅く腕を持して動かぬやうして下さい。』

『なぜ右手では出來ないのが左手に於ては出來るのか？』

『閣下の右手は中央の凹みが深うございますから、指を切る恐がございます。けれども左手は中央が高いから、大丈夫と存じます。』

ナピールは此時始めて、

『かの奇術師は眞に劍を揮つてあんな微妙なことをするのであるか。』

と感嘆した。かくてナピールは衆人の前に於て自分で挑んだことであるから、退くに退かれずして、橙子を手上に置き、腕を差し伸べると、奇術師はやをら劍を整へ、白刃閃くかと思ふ間もあらせず、忽ち橙子は兩分された。然し此時劍の刃の手上を過ること恰も冷かなる糸を觸れ！めたやうであつたといふ。

奇態なる廣告

世界に於て濠洲ほど新聞紙に奇妙な廣告の出るところは少からう。その一二を擧ぐれば、

◎

某夫人は自分の愛嬢に對して無禮なる言語を用ゐたり、同夫人にして今後尙ほ同一の行爲あるに於ては、妾は斷然彼女を法廷に訴ふべし。仍つて此段廣告す。

年　月

◎

ミセス・ゼーン

余はヘレンに於て他人を毆打し、又罵詈惡口せり。然し今後は決して前非を復びせざるの覺悟なり。仍つて此段江湖に告ぐ。

アレキサンドル（記名）

月　日

◎

余は某君に向つて、自今無根の事實を揑造して余を讒誣せざるやう忠告致候に付、此段廣告致候也。

サラー

月　日

回教國の俚諺

逸話とは少しくかけ離れてゐるかも知れないが、國風の一端を窺ふため、左にペルシヤ、アラビヤ、トルコ等に流行する俚諺の一二を示さう。

◎

馬を見ること友の如く、之を乘ること敵の如くなれ

◎

放ちたる矢は返らず。

◎

饑ゑたる者は飽く日あるを思はず、飽ける者は將に來るべき饑ゑを思はず。

◎

食に飢うる者は滿足せしむべし、欲に飢うる者は滿足せしめ難し。

踵にて耳を掻くが如し。

◎

林檎は其木の下に落つ。

◎

木は枯れぬうちに撓めよ。

◎

苦みなき頭顱は墓中にあり。

◎

大なる頭に大なる苦みあり。

◎

利刀も其柄を切る能はず。

◎

只の五も五なり、十五の五も五なり。

◎

人を知るには共に旅せよ。

◎

多く知る者は多く誤る。

◎

輝くこと速かなれば消ゆることも亦早し。

◎

一父能く九子を養ふ、九子一父を養ふ能はず。

◎

百人の乞食一室に容る、二人の王千里の地に容れず。

◎

一艦飾り易し、一女飾り難し。

◎

病まざる者は無病の價値を知らず。

◎

看護は病よりも辛きもの。

◎

僕たる能はざる者は主たる能はず。

◎

水車を見るな水を見よ。

愛妻に心臓を送る

南獨逸のイリヲノイスといふ所に、ブラントといふさる新聞の印刷人があつた。彼は青年の折に妻を迎へ、交情甚だ濃やかであつたが、生活上の都合により、妻を國許へ殘して米國に渡航したぎり、數十年の間種々の都合によつて本國へ歸れなかつた。

かくて空しく日を過ごすうちに、不圖した風邪の心地で打臥したまゝ、病は

日々に重るばかりで、も早や死を待つの外なき身となるまで、寸時も妻のことを忘じ難く、隔絶にただ一目と思へども、海山萬里を隔てし故國の事とて、翼なき身のせんすべなく、

『せめては夢寢の間にも故郷の山川を回つた我が切情の一端なりと妻に知らせて、今まで打絶えて音信しなかつたのは、決して薄情の爲ではないといふことを證據立てたいものだ。』

と考へたので、日頃親交あつた友人某を枕邊に呼び、

『余が死んだ後は、これまで打絶えて音信しなかつた詫の爲に、一つにはわが愛情を知らせて彼女の疑念を解くために、わが心臓をアルコホルに漬けて本國の妻へ届けてくれ給へ。』

と、懇々と頼んで瞑目した。そこで友人はプラントの遺言の程を汲取つて、終に一醫學士に依頼して彼の死體を解剖し、心臓を抉出してアルコホルに漬け、之を白髪の寡婦へ送つたといふ。實に哀れな物語である。それにしてもナポレオン第一世の最後の物語によくも似たものではある。

將軍ミツチエルの機敏

米國南北戰爭の際、北軍のミツチエル將軍は、南軍をブリツシボルトに擊破し、逃るを追うてデベルソンに到り、遙か彼方なる敵軍を見渡せば、前面に白雪一帶の長堤がある。ハテナと思つて近づいて見ると、河橋を燒落す間、南軍が化軍の追擊を支へるため、五百個の大綿包を以て小砲臺を築いてゐたのであ

つた。然し此時は南軍既に遠く遁れ、河橋は燒落ちて渡ることが出來なかつた。

ミッチエルは、早速線包に目をつけて、

『これこそ天の與へ！』

とばかり、繩を以て綿包を連ね、各個の距離を約一丈となし、その間の繩ばかりの處には板片を括りつけ、更に綿包を支へるために處々に鐵の抗を立て、かくして次第に向岸に達し、三百餘間の大河に、見る〳〵氷山を連ねたやうな浮橋を拵へ上げた。

かくて其日の夕方に兵を進め、三千の歩兵、野砲、輜重、騎兵等陸續として綿橋を渡つた。此に於て將軍は五百の綿包を悉く集め、汽車を以て市に送り、

之を賣却して二萬弗の金を得、以て軍資に供したので、人々皆將軍の機敏を稱した。

勇敢なる少女傳令使

米國獨立戰爭の時、米將グリーンは英軍をナインテーセクスの城砦に圍み、晝夜息をも繼かず攻め立てたけれども、敵は援兵の來るのを心恃みに、能く防戰したので、容易く陷るべくもあらず、唯だ遠卷にして日を過ごすのみであつた。

兎角する間に敵の援軍數多到着したので、グリーンも已むを得ず圍を解いて引揚げようとした。然るに此時早くも敵兵は雲霞の如く米軍の周圍に殺到し、

その退路を扼した。そこでグリーンは驚いて、援を米將ソンテルに乞はうとしたけれども、敵陣を衝いて此使を完うしようとする勇士が一人もなかつた。

然るに此時自ら進んで此大任に當らうと請うたものが唯だ一人あつた。如何なる勇士かと全軍その者に注目すると、意外にも紅顔花を歎く妙齢の一少女であつたので、一軍皆舌を捲いて驚嘆した。彼女は名をエミリー・ギーゲルといひ、カロリナ州の産である。

ギーゲル乃ちグリーンの密書と口上とを帶び、悍馬に泡をかませて、大膽にも英軍の陣を衝いて走つた。勿より婦人のこととて敵は初め少しも彼女を疑ふことがなかつたが、漸く敵の哨兵線外に達せんとするとき、一番兵は彼女を怪んで、

『止れッ！』

と叫んだ。ギーゲルは、

『しまつた！これは一大事。』

と、早速グリーンよりの密書を呑み込んだ。

『何れから何れへ行く！』

『ナインテーセクスから隣村の叔母のところへ遊びに參ります。』

『名は何といふ？住所は？』

『名はエミリー・ギーゲル、住所はナインテーセクス。』

尙も番兵は彼女に近づき、頭髪、衣類などを殘る隈なく調べたけれども、更に怪しい物もなかつたので、

『通つてよろしい。』

と、遂に通行を許した。ギーゲルは初めて蘇生の思をなし、尙も汗馬に鞭をあげてソンテルの陣に到り、グリーンの口上を詳細に陳べ、且つ途中の狀況を具さに物語つた。此に於てソンテルは深く彼女の勇敢を賞し、直ちに援兵を進めて大に英軍を擊破した。

妙齡の少女猛牛を投げ倒す

獨逸の伯林に、フローレン・ヨハンナ・メーストリツクといふ勇女があつた。もと伯林に生れたのであるが、幼時父母に從つて葡萄牙に移り住んだ。人となり美貌艶姿、見る者をして恍惚たらしめた。

メーストリツクは好んで鬪牛者たらうと欲し、その技を練習した。けれども未だ曾て公衆の前に於て技を演じたことがなかつたが、一度始めてオボルトの鬪牛場に出た。その日は此珍らしい少女鬪牛者を見ようと、數萬の觀客が來集した。

然るにメーストリツクは難なく二頭の大牛を地上に投倒し、大喝采の中に旅宿に歸つた。旅宿の前には鬪牛場よりの觀客が殺倒して、彼女の爲に喝采して止まなかつた。彼女は則ち表窓に立つて之に答禮し、遂に其夜深更に至るまで退室されなかつたといふ。

美詩人と醜詩人

アレキサンダー●ポープは、聲音雅美にして、性質の溫良と、書法に達して居つたのとで有名である。殊に容顔玉の如くであつた。そのため二十歳の時、一佳人に思戀せられた。然し品行方正なる彼は、毫も彼女の望に應ずる樣子がなかつたので、佳人は失望して遂に自殺した。之を聞いて彼は深くその薄命を憫み、『薄命詩人』と題する歌を作つて之を弔うた。

ポープに引きかへバイロンは跛なるが上に、容貌も美なる方ではなかつた。その爲に十五歳の時、或る一少女に想を懸けたけれども、先方は冷々淡々として更に應ずべき樣子もなかつた。此に於てバイロンは失望落膽し、『夢』といふ

詩を作つて自ら慰めた。けれども悶々の情尙ほ禁じ難く、二十一歳の時、傑作『チヤイルド●ハロルド』を著し、その中の憂鬱なる主人公ハロルドを以て自らに擬した。

同じく詩人にも顔の美醜によつてかくまで差異のあるものであらうか。

ダブエットの冷淡

佛國の畫家ダブエットは、自らの研究に熱中する時は凡ての世事に極めて冷淡であつた。

彼は其親友ダントン及びカミールデスムリンが死刑に處せらるゝ際の如き、寫生術を研究しようとて、群衆にまじつて刑場に臨み、その死狀を寫生して少

しも悲哀の何物たるかを知らぬ樣子であつた。

また彼は千七百九十二年、ラフォールスに於て罪人を虐殺した時も、亦たその塲に臨んで、冷然として臨終の狀を寫生した。そこで傍なる一友人が之を見答めて、

『君は何をするのか?』

ダブエットは冷然として答へて曰く、

『惡漢の臨終の痙攣苦痛を寫生するのみ。』

我が指の墜ちたる地は第一要害

佛國の名將軍ファベールは、敵の城を圍みながら、一日、砦壘を築かうとして、營外を巡視した。然るに偶々一流丸に中つた一指を墜し、而も從卒は皆之を知らなかつた。

ファベールは知らぬふりして、その從卒を顧みながら、

『此邊の地理を察するに、第一壘を築くべき塲所は、わが手指の墜ちてゐる所である。

從卒乃ちその在所を探すに、果して後邊百歩の地にその指を發見したといふ。

味方强きに非ず敵弱し

佛國のチユレンヌ將軍、一日、敵と戰つて之を敗るや、直ちにその妻に書を送つて、

『敵進みて我に迫り、却いて敗走す。われ謹んで天恩の渥きを謝す。本日われ少しく勞れたり、今將に寢に就かんとす。御身の無事を祈る。』

而て其文中には勇戰の狀況など一も記してない。故に後人之を稱へて、

『功伐の雄偉なる、今日誰か能く彼に比せん。而して謙讓にして矜らざること今日亦た誰か克く彼に勝たん。』

と記して居る。

之より前、將軍の戰に勝つや、人に語つて、

『わが巧なる爲ではない、敵が自ら過つたのである。』

また戰況を報ずるや、決してその功伐を語らなかつた。而て後その實戰の狀況を談ずるに、聞く人誰も、その戰の時の首將は將軍であつたといふことを、忘

れたかのやうであつたといふ。また將軍の凱旋するや、人民の歎美を避けて隱匿して出でず、恰もその勝を慚づる者の如くであつた。將軍の高風實に敬仰に堪へず。

エフラッシ鬪はずして敵を服す

佛國巴里にブレテューイルといふ豪商があつた。或る年小麥相場の爲に非常に失敗し、鬱々として樂まず、獨り心に思ふやう、

『これは全く友人エフラッシが自分を欺いてこんな目に遭はしたのである。己れ憎つくき相場師奴！』

と、憤怒の餘り遂に決鬪を申込んだ。

然るに相手のエフラッシは豫て脚部に痛患あり、起居不自由にして、到底決鬪場に出來ることが出來ぬので、兩三友をブレテューイルの許へ遣し、

『御申込に對して出なければなりませぬが、實は脚に腫物があつて歩くことさへ出來ぬから、暫く決鬪の中止を願ひます。』

と、百方陳述したけれども、ブ氏は少しも聞き入れなかつた。そこで仲裁人も詮方なく歸つて、右の旨をエ氏に話すと、彼は首肯いて、

『抑々此事の起りたるや、商賣敵といふものゝ致す所である。即ち彼は小麥の買方で余は賣方となり、共に市場に勝負を爭うた末、遂に彼は此度の失敗を招き、且つ余は幾分儲かつたのである。故に此際余の儲けた金を悉く出して彼に返却したら、別に怨みもなからうから。』

とて、立所に百萬法の巨金を出して、ブ氏に贈つた。

此に於て流石强慾のブ氏も、エ氏の潔白に愧ぢ、その金には手をも觸れずしてエ氏へ返還し、

『足下の潔白なる精神に對して、何共耻ぢ入つた次第です。どうか小生の無禮は許して下さい。』

と言ひ遣つた。けれども正直なるブ氏は之に安んぜず、結局仲裁人に委せて、双方の名義を以てその金を殘らず巴里の養育院に寄附したといふ。商人には珍らしい美談である。

蠻人の操節

西班牙が南亞米利加を征したとき、蠻族の酋長ガチモンといふもの、西班牙の將コルデスに捕へられた。

コルデス乃ちガチモンを脅やかして、

『金銀財寶の在所を告ぐれば命だけは助ける。若し飽まで頑張るとあれば可愛想だが命は頂戴する』

と、ためつ賺しつしたけれども、ガチモンは頑として告げなかつた。

コルデスは怒つて、ガチモンを炭火の上に炙つて、嚴に之を糺問した。ガチモンは火上に炙られて肢體焦爛するに拘らず、神色自若として敢て屈せず、コ

ルデスの拷問は益々烈しくなつた。此に於てガチモンは怒の眼を見張つて、

『あゝ汝殘賊！如何に汝が我れを責めたとて何で言はう。』

と罵つた。而て己の部下の者が、同じく捕へられて火責に逢ひ、苦叫して居るのを見て、憤怒の形相物凄く、

『あゝ汝コルデス！汝は何たる卑怯者か。我が義の爲に此に在るのに、汝は不義を以て之を强迫するのか。』

と大喝して、やがて蕉殺された。蠻人と雖もその操節感ずべく、文明人と雖もその殘虐惡むべし。

ダヴエナント徳を以てミルトンに報ゆ

ダヴエナントは有名なるジョンソンの死後、後任として宮室に招かれて詩伯となつた詩人である。

時に英王チャールス第一世と國會との間に爭亂が起つた。然るに彼は熱心に王權を擁護したので、後に國會黨の危害を加へんことを恐れて佛國に亡命した。

その間に『ゴンバヂート』といふ詩を作つて英雄を詠んだ。

既にして佛國を出て米洲ヴアージニアに渡らうとしたが、途中に於て國會黨に屬する水夫の爲に囚はれ、倫敦の獄に錮せられた。獄中に在る事數年、共和政府は遂に彼を斬に處せようと決定した。然るに政府部内に勢力を有したるミ

ルトンが、百方手を盡して彼を辯護したので、辛うじて生命を全うすることが出來た。

故を以て彼は深くミルトンを德とし、何時か恩を報じようと思つてゐた。恰も好し、此時王政黨はチャールス第二世を奉じて、國會黨を破り、ミルトンを捕へて獄に投じ、既に一命にも及ばうとするに至つた。

此に於てダヴエナントは大に驚き、且つ、

『厚恩に報ゆべきは今だ！』

とばかり、一心不亂にミルトン救免に盡力し、爲にミルトンは辛うじて無罪となつた。これ德に報ゆるに德を以てせるものといふべきか。

フリードリヒ第二世と老媼

プロイゼン王フリードリヒ第二世は仁君であつた。一日、シレッツエンより伯林へ行く途中、一老媼があつて、王の車駕へ進み近づいた。そこで王は面を和げて、

『何ぞ用でもあるのか？』

老媼、

『妾は年來親しく王の龍顏を拜し申さう〳〵存じて居りましたが、幸ひ今日ご通行を迎へ奉ることが出來まして、甚だ光榮と存じまする。けれども御車との間があまり遠くて、老眼にてはよく拜することが出來ませず、覺えず不敬を仕りました。

其時王は自らポケットより一銀貨を取出して、

『朕は今忽忙の旅行をしてゐるのであるから、汝に朕が面をゆつくり見せる暇がない。さりとて汝の望を失はせる譯にもゆかぬ。故に汝に之を與へるから、汝能く之を視よ。此錢の面に刻んだのは朕が面であるから。』

とて、乃ち車を驅つて通行された。

貧農の子化學藥品の大家となる

化學藥品師ボーケリンはカルワトスの農夫の子である。鄉里の小學校に通ふ頃は、弊衣垢面の一貧兒であつたけれども、天性の慧敏と刻苦忍耐とは、忽ち

校中にその才を顯し、その師の如きは、

『ボーケリンよ能く努めよ。他日汝は必ずや教會長の如き美服を著るの人となるであらう。』

と、褒め且つ勵ました。

一日、藥舗の主人がこの學校に來て、彼の身體の壯大なるを嘆美し、

君どうだ、余の店に來て藥品を秤る仕事をやつてくれないか？』

とのことに、ボーケリンは早速之を承諾した。

彼は翌日から早速藥種屋に奉公したが、後、勉强する暇がなかつたので大に失望し、且つ疲勞の爲に病を發し、一時は醫者に見限られた程であつた。然るに幸に快復し、後遂にフールクロイといふ化學藥品の大家に知られ、其家へ

引取られた。これぞボーケリンが立身の緒であつたのである。

卽ちフールクロイの家にあつて製煉を研究すること數年に及び、師の死後その後繼者として化學藥品の學師となつた。かくて千八百二十九年、カルワトスに於て代議士の選擧があつたとき、選ばれてその任に當り、故郷に錦を飾つたといふ。

戀愛大詩人を作る

英國スコットランド王ジエームス第一世は、學識に富み、詩と音樂とに堪能なる人であつた。

曾てイングランドに囚はれてウインサーの座敷牢に繫がれたとき、一日、そ

の窓より戸外を視いたところが、恰もソマーセット公の愛嬢ジョアン●ビウフオードが庭園を散歩してゐるのを見た。是より王は彼女を戀慕すること甚しく、焦れ〳〵て遂に『王の歌』といふ一篇の詩を作つて、彼女の庭園を散策する狀を歌つた。然るに此詩は非常によく出來て居るので、忽ち文學界にその名喧しく、王の詩名は一時に揚つた。而てこの詩の主人公こそ王の未來の皇后であつた。

米國使節ハルリスの和歌

安政年間、浦賀に來つて我國に通商貿易を請うた米使ハルリスが、幕府に献じた和歌として、一時坊間にもてはやされたものがある。その眞僞は不明であるけれども、左に之を紹介する

天さかる　カルフオルニヤに　見し影の
小春に霞む　武藏野の月

英雄にも迷信あり

西洋の英雄豪傑の中にも亦た緣起を祝つたり、運不運を氣にした人が多い。英國の革命政治家クロムウエルは、緣起の好い日と、その惡い日とを定めて居つた。彼が二大戰に勝利を得たのもその緣起の好い日であつたし、また彼の誕生日も丁度その好い日に當つてゐる。また彼が死んだのは、その緣起の惡い日であつたのも不思議であるとの話。

提督ネルソンは、白日と黑日とを定め、白日は縁起の好い日、黑日はその惡い日、と信じて居つた。

英國のマルボロー將軍は、佛國のルキス大王を辟易させた人であるが、運不運を信じて居つた。

また歴山大王、羅馬の大政治家シーザー、同じく雄辯家シセロ、英雄傳の著者プルターク、近世哲學の祖ベーコン等は皆運命を信じて居つた。

勿論運命を信ずることは哲學上の一種の見解であるからよいが、縁起の如きは一種の迷信といふべきであらう。

灰と粉との區別

セント、ベルナードは、宗教界に於ても得難い名僧智識である。然るに灰と粉との區別は解らなかつたと見える。

即ち一日或る人が試みに、灰製の菓子と、粉製の菓子とを混じて、ベルナードを饗した後、

『貴僧は孰れが旨しく感ぜられましたか？』

と問うとベルナードは、さも不思議さうな面持にて、

『只今のは同じ菓子のやうに思ひましたが、さて御尋ねのことは薩張りわかりませぬ。』

と問ひ返したといふ。

ベーコン華族を罵る

ロード・ベーコン曾て華族を罵つて曰く、

『彼等は自らは何等の功をも有しないで、今日尙ほ榮華を極めてゐる。これ皆彼等の祖先の餘功によるものである。故に吾々は彼等を以て馬齡薯に喩へよう。これ彼等の價値ある部分は皆土の中に埋れてゐるからである。』

人さま〴〵

英國の詩傑バイロンは、その詩を作る時には、先づ一撮みの食鹽を服用した。そこで或る人が奇妙に思つて、その故を問うと、彼は答へて、

『詩を作る時は精神を興奮させなければならぬ。予が精神を最もよく興奮させるものは食鹽であるから、』

また英國知名の辯護士カランは、訴訟上の辯論に力を注ぐ際は、先づヴアイオリンを奏でながら、漸次その佳境に進む間に、辯論すべき條次を考へ置き、愈々彈じ畢れば、徐ろに法廷に出でて熱辯を揮つたといふ。

また英國の詩聖ミルトンは、自分の側に於て家族にオルガンを彈ぜしめ、その愉快な調子によつて感情を調へながら、始めて詩作に向つたといふ。

伊太利の戯曲家アルフエリーも亦た音樂を好み、常に人に語つて、

『予の悲劇院本は、予が音樂に聽きとれて居る間になつたものが多い。』

といふたといふ。さても人さま〴〵なる世の中かな。

結婚後の新經驗

佛國の文豪ラ●ブルーエルは、結婚後の經驗をその友人に語つて曰く、

『結婚は決して愉快ではない。予は自らの經驗に依つて、凡そ何人も妻を娶つて後、少くとも一日に一回はその結婚したことを後悔しない者はなからうと思ふ。』

羅馬法王の宣告文

古昔、羅馬法王は、一時全歐洲の政治にまで干渉し、『王の王、帝の帝』と稱して暴威を恣にした。就中最も跋扈の甚しかつたのは羅馬法王グレゴリー七世

である。

グレゴリー七世に至つて羅馬法王は、帝王を廢するの權あることを主張し、遂に獨逸皇帝に向つて之を實行した。その時の宣告文がある。曰く、

朕はヘンリー（獨逸皇帝ヘンリー第四世）が獨逸帝國及び伊太利を支配するを禁じ、且つ兩地の人民をして同人に對する忠義の誓を解かしめ、何人と雖も同人を君主として戴き且つ之に仕ふることを嚴禁す。

深閨の少女名小説を著す

文學界に相當の名を博したマダム●ドヴレーが、まだバルネーといつて十七歳の乙女であつた頃、『エウイリナ』と名づける有名なる小説を著し、都の書肆に

交渉して、密かに之を出版したことがある。

然るに其後間もなく彼女の父が上京して、當時『エウイリナ』の評判が非常に高かつたので、娘の土産にしようと、一本を求めて歸國した。家では父の歸國を迎へて、何かと都の珍しい話を聞くに、父は、

『別に珍しい話もなかつたけれど、予が土産に持歸つた此小説は、すばらしい評判である。』

とて、やをら鞄の中から『エウイリナ』を取出して、讀み聞かせた。

この小説こそ餘人ならぬバルネーの作であるから、彼女は顔に紅葉を散したけれども、流石にそれと打明ける機會を得ず、たゞ俯いて聞いて居るのみであつた。

父はそれとも知らず、頻りに稱揚して數節を朗讀し、家人は皆その妙處に至る毎に賞讃して止まなかつた。そこで先刻から始終無言にて父の傍に在つたバルネーは、

『今はも早や隱すべきでない。』

と父の膝下に身を投出し、涙ぐみながら、

『これまで隱しましたことはどうかお免し下さいませ。實はその小説の作者は妾でございます。』

と語り出したので、父は呆然として本を手から取落し、家人はこれまた茫然として爲すところを知らなかつた。が、然し歡びは此一家の中に溢れた。

ブライエン獄鳥と綽名せらる

英國政界に於て、バーネル派の驍將として聞ゆるブライエンは、アイルランド選出の代議士である。

彼は曾て罪を言論に得て、獄舍に禁錮せられた。けれどももと〳〵普通の罪人ではないから、

『死んでも獄衣を着るものか。』

と頑張つて、とう〳〵寒中なるに係らず獄衣をずた〳〵に引裂き、裸體のまま一夜を明した。

此に於て監獄醫は、

『これで命をなくしてはならぬ。』

と、已むを得ず事情を當局に具申して、病院に移し、且つ特別の取扱を以て常服の着用を許した。

其後彼は入獄する毎に此流義を發揮したので、獄吏は、

『些々たる獄衣のことで一命を失ふのは馬鹿げてゐはしませんか。』

と、度々忠告したけれども、彼は、

『普通の罪人ではないのだ。何で柿色の衣なんぞ着るものか。』

とて、毎度大騒動を惹き起した。

彼は生來勇敢にして、一身を犧牲として、職として英國政府の暴虐を天下に證明した。爲に度々禁錮されたけれども、更に意に介することなく、獄中にあ

りながら尙もバルフオールの專横非政を鳴らした。それで期滿ちて漸く出獄すると、また政府を攻擊して禁錮されるのであつた。故に其頃世人は彼を稱して獄鳥と綽名した。

ワルポール反對黨に助けらる

英國知名の政治家ワルポールが、まだケンブリッヂ大學に在つた頃、熱心に民權論を主張した。然るに或る年激烈なる天然痘に罹り、一時頗る危篤に陷つた。時に王權黨に屬するブランヂーといふ有名なる醫者が、偶々彼の主治醫となつた。

時にブランヂーは助手に語つて、

『僕も君も十分力を協せて此少年を救はぬければならぬ。若し誤つて死に致すときは、世人から、彼等はワルポールを反對派なりとの故を以て故意に拋擲したのである、と罵られるであらう。』

かくてワルポールは此反對派の醫者の熱心なる治療に因つて全快するを得た。

このブランヂーといふ人は、素と民權黨を惡むこと甚しく、政治上極めて片意地の强い人であつたが、ワルポールの精神に感じて、一日、人に語つていふやう、

『ワルポール君が不思議にも斯る難病からその生を全うするを得たのは、天が此人を生存せしめて、將來大業を成さしめる爲であらう。』

プリン愛嬌毛を非難す

ジエームス第一世の頃、一般美人の間の流行として、左の顳顬の邊に二筋三筋の髪毛を下ぐることが行はれた。其頃この髪毛を愛嬌毛と名づけた。

然るに此にプリンといふ論客があつて、ジエームス第一世の崩後直ちに『愛嬌毛の醜さ』といふ一長篇論文を著して、

『愛嬌毛の派行は面妖の甚しいものである。』

と非難した。

耳環使用の嚆矢はシーザなり

羅馬の大政治家ジユリアス・シーザーは、その少年の頃、好んで耳環を用ゐて、其頃流行の魁となつた。

蓋しその以前には婦人及び奴隷に限つて耳環を用ゐて居つたのであるが、それから次第に流行して、アレキサンドル・セヴエラスの時に及んだといふ。

歐洲の始皇帝

熱心を以て聞えたニコラス・フエルラルといふ宗教家は、その死前三日、家人に命じて自らの墓地を卜せしめ、また之に命じて、

『予の書齋に長く封印したまゝの書箱が三つあるから、皆取出して、予の墓地の上にて悉く燒棄てよ。』

とて、その書箱を取出させ、

『これは悉く小説詩歌脚本の類である。全く人間無用の書であつて、人心を腐敗させるの外何等効のないものであるから。』

とて、遂に燒棄させた。

ゴブデンとブライトの交り

第十九世紀に於ける英國政治家の一美譚ともいふべきは、ゴブデンとブラントとの管鮑の交りである。

兩人の交情は水魚も啻ならぬ仲で、骨肉と雖も遙かにその友愛に及ばない程であつた。卽ち政治上に於ける運動を共にし、或は非穀法に或は平和説に、全

力を注いで奔走斡施し、寸毫も間隙の情なく、非を諫めあひ、功を分ち、艱險なる政治の海に游泳して、形影相伴ふこと實に二十五年の永きに渉り、殆ど一心同體の觀があつた。

ゴブデンは常にブライトを稱して、

『彼が一人余の側にゐてくれれば、余は百萬の援兵を得たのよりも猶ほ心强い。』

またブライトは曾て國會に於てゴブデンの吊辭を述ぶる時、次の如く語つた。

『余は今日まで彼を愛したこと如何ばかりであつたか自分でも知らない位である。』

此に於て世人は彼等を稱して、

『民政の胎内から生れた双生兒。』
と呼んだ。至極尤である。
此に米國カリフォルニヤ州ヨセメテの谿谷に、亭々たる二株の喬木がある。一千八百六十四年八月、義俠なる米人等は、白大理石の板を掲げて、其一にゴブデンと署し、他の一にはブライトと刻した。爾來ヨセメテに杖を曳くもの、毎に此二大樹の下に至り、佇立低徊して彼等の溫かなる友情を偲んだといふ。今尙ほ果して此等の樹存するや否や、

ハメリツク博士鷄と談る

亞弗利加バルチモーアにアスガー・ハメリックといふ博士があつた。此人は

鷄の言葉を研究して、遂にその話を解するに至つたといふ。
博士は多年交趾種の鷄を飼育して、毎日彼等の意思を通ずる方法を研究した。博士は人に語つていふやう、
『世の中に鷄ほどお饒舌はない。而してその感覺の發達してゐること、嗅覺を際く外、皆殆ど人間と同じである。また鷄は赤と青の二色を厭ひ、殊に赤色に對して大に敵意を表すものである。
博士はまた鷄に人語を敎へて、遂に之を理釋せしむるに至つたといふ。即ち博士は交趾種の牝鷄五羽を飼育し、之に各々ピート、ベット、バット、ボットといふ名を命じた。その中ボットは一番悧巧で、主人から呼ばれると、
『サー、アイアイ。』

と答へた。博士も亦その鳴聲と身振とを研究して、左右の足を以て塵芥をかき散らし、同時に頭を傾けて一方の眼を以て餌の有無を調べる風などは、頗る巧であつたといふ。

ピーター大帝の曠量

露國中興の英主ピーター大帝は、度量頗る大にして、小事に拘泥することがなかつたから、卓犖不羈のあまり放達に流るるに至つた。

大帝は人に接するに城府を設けず、胸中綽々たる餘裕に富み、光風霽月の如くであつた。故に宴會などには、大小となく、駕を命じて之に臨み、殊に國際的宴會には華美を盡して臨席された。然し內部の生活は非常に質素にして、

普通人の幾んど堪へ難い程の節儉を行はれたといふ。

伊太利皇帝の勞力ニフランを得たり

伊太利皇帝ヴイクトル・エマニエル第一世は、日頃より狩獵を好み、屢々アルプス山中に微行して禽獸を獵りくらされた。

一日、その日も山中に狩りくらして、夕方一人の侍臣と共に山を下られるに、田圃の草を取つてゐた一農夫が聲をかけて、

『獵人さん、此邊には一匹の狐が居つて、毎晩作物や家禽を荒して困りますが、どうか獵り取つては下さるまいか。どうかお願申しやす。』

帝は之を聽かれて、

『何より易いことだ。然し今日は彈丸も盡きたから、明日參らう。』

とて下山された。

かくて翌日帝は、

『今日こそ昨日農夫の話の狐を射取つてやらう。』

と、またも一侍臣を從へて登山し、山々峰々を獵りくらし、漸く狐の在所を知つて、之を打取られた。そこで狐を提げて、昨日の百姓に屆けられると、百姓は大に喜び、

『これはホンの志ばかりで……。』

とて、謝禮として帝に二フランを贈つた。帝は喜んで受納し、

『余が誠實の勞力を以て金錢を得たのは、今日が始めである。』

とて歸られた。其後間もなく彼の農夫を行在所に召喚されると、百姓は何事であるかと、取るものも取り敢へず駈けつけて見た。然るに先日獵夫と看たのは豈に測らんや皇帝であつたから、恐惶頓首して爲す所を知らなかつた。その時帝は、慇懃に先日の禮を述べられ、且つ巨額の金を取出して、

『これは先日の利子であるぞよ。』

とて、二フランの金と共に返された。

日耳曼太子の裁縫

日耳曼皇帝フレデリック第三世は、千軍萬馬を叱咤し、砲煙彈雨の中を潜拔けた猛者であるのに、日頃は極めて優しい性質の方であつた。

帝がまだ東宮にあらせられる頃、伊太利皇子ウンベルトの婚禮を祝するため、父帝の御名代として伊國に赴かれた。此時フレデリック太子は、宮中の宴會に於て、伊國皇太子妃とダンスをして居られたが、その側に是も同じく宴に列なつた陸軍武官の靴の拍車が、圖らずも皇妃の裳に觸れたので、裳端破れて蜒々として席上に引いた。

時に皇妃は年若な婦人であつたから、些か激して、手を差伸べるなり、破れた部分を把へて引裂かうとされた。フレデリック太子は之を觀て、靜かに皇妃を押止め、

『暫らくお待ちなさい。』

と、そのポケットから一個の留針を取出し、心靜かに衣の裂目を縫ひつけられ

た。數多の女官は之を見て、直ちに駈けつけ、

『妾が致しませう』

と手を出すと、太子は、

『いや、よろしい。』

とばかり、獨手で縫上げてしまはれた。

此に於て此事が直ちに貴族の間に言ひはやされ、伊曼兩國の貴婦人令嬢等、皆々太子を艶賞したといふ。

ダングラー毅然として暴力に屈せず

佛國革命の頂點に達するや、衆民漸く疲憊して靜平を希ふに至り、秩序將に

恢復せんとするに至つたけれども、如何せん、數年の擾亂に、諸民天下に滿ち、朝夕の食すら之を得るに由なき者、此處彼處に屯集して、千七百九十五年の頃には、國會の内には平和を希ふ者もあつたけれども、若し一二の人にして暴民を煽動するに於ては、一たまりもなく議會の内部を搔き亂すことの出來る狀態にあつた。

斯る紛亂の際、佛國史上に光輝を發すべき二大美事が起つた。その一は、少年義勇軍が、暴民の襲擊を却けて國會を保護したことで、その二は、議長が兒刄の下に自若としてその脅迫の決議を却けたことである。

是より前、ロベスピエール既に死したるも、その殘徒なほ亂を謀つて議會に押寄せようとし、事露れて縛に就いた。そこで此等の審理を行はうとしたところが、俄に巴里城内に一揆勃發し、口々に、

『宥免を嘆願するのだ！』

と叫びながら、議會に殺到した。然し其實は暴力を以て議會を脅迫し、以て正當の決議を破らうとしたのである。然るに之は少年義勇軍の奮鬪に由つて一先づ擊退するを得た。

ところが其後暴民は再び、

『パンを與へよ！一千七百九十三年の憲法を恢復せい！』

と、數萬の群衆闕を作つて議會に押寄せ、戸を排して闖入した。此に於て代議士は劍を拔いて自ら防ぎ、護衛兵は市内より參集し、暴徒は銃丸を發ち、代議士倒れ、良民傷つき、上を下への大混亂となり、暴徒は遂に議場を占領した。

此時の假歸長はポアシー●ダングラー氏であつたが、暴民は氏の襟をつかみ、白刃を胸に差附け、大呼して、

『我等の請求に從つて議決を爲せ、汝の生死は汝の答へ如何にあるぞッ！』

と脅喝した。然るに氏は少しも騒がず、

『汝は暴力を以て正義の議決を左右しようとするのか。議會の神聖は汝等如き暴民によつて汚されることはないぞ！』

と叱したので、流石の暴徒も、正義に敵する及なく、何等の危害をも加へ得ずして退いた。然るに此暴動は、もと代議士中の激徒が隠に之を敎唆した爲に起つたのであるから、議席に留つた激徒は、暴民と呼應して、一時非理の決議をなした。

けれども正義の士は漸く四方より來り集つて暴徒を驅逐し、幾許ならずして正當の議決に復するを得た。これ主としてダングラー氏の勇決と、それに感じた人々の義憤とによるものである。以て公聽に在る者の模範とすべし。

小ピットは卽身大人なり

英國の大政治家ウイリアム●ピットが、始めて議會に於て演說を試みたのは、一千七百八十六年二月二十六日にして、彼時に年漸く二十一歲であつた。

當時議院に於ては、バークが提出した改革議案の討議最中で、大臣ニウゼント卿は、痛く此提案に反對意見を述べた。時にピットは、ピングといふ人の勸めに依つて之に對する答辯をしようと思ひ、半ば心に決してゐた。然るに議席

に就くや、志を變じて、
『演說はすまい。』
と、深く決意した。ビングはそれと知らないから、ニウゼント卿の反對論が終結するや、頻りに、
『ビット君、ビット君。』
と促した。其他の議唱も亦之に和して、
『ビット氏、ビット氏。』
と叫び、遂に前議員の叫ぶ所となつた。そこでビットを今は拒むに由なく、悠然として演壇に上り、雄辯を縱橫に揮つて、ニウゼント卿を論駁した。初陣ながら未來の大政治家、流石に論理徹底し、意氣あり態度語調に力あつて、寸毫

の隙もなかつたので、喝采の聲議會內を震はした。
殊にバークの如きは、感嘆の餘り、ビットの手を握り、
『あゝ末頼母しい我が少年政治家よ、君は能く大人の性質を承けしのみならず、實に即身大人なり。』
と、稱讃した。蓋し大人とは父なる大ビットを指したのである。

政治の大家は多く小選擧區より出づ

英國のデルビー伯が、選擧區改革案を提出したとき、グラッドストーンは、小選擧區を存すべしと論辯して曰く、
『古來小選擧區は多くの政治的偉人を出してゐる。今その例を擧ぐれば、ベル

ハムは二十二歳にしてシトフォルト選擧區より出で、チャダン卿は二十六歳にして、オールドサーラムより出で、フォックスは二十歳にしてミッド・ハーストより選出され、ピットは二十一歳にしてアップルビー選擧區より出で、カンニングは二十二歳にしてニュポートより出で、ロバート・ピールは二十一歳にしてカッセルから出馬した。此等は總て皆一方の首領となつて居つた人達ばかりである。また英國國會史上に卓立せる人達ばかりである。將また一人として總理大臣とならなかつた人はない。是に依つて之を觀れば、小選擧區の存否は國家の大問題であつて、決して之を廢止してはならぬ。』

氏の歸納は果して正當であるか。また他の國々に於ては如何であるか。

ゴブデン空論を慨す

英國の名代議士リーチャード・ゴブデンの演說は、簡易にして明瞭、敏捷にして痛切、毫も冗漫の風がなかつた。

彼は曾て議會の演說が、冗長に失して要領を逸し、枝葉に涉つて空論に流るゝを慨し、人に語つていふには、

『山上の垂訓は二十分にして讀盡すべく、主の祈禱文は一文にして唱へ終ることが出來る。ワシントン、フランクリン、彼等は皆一回十分以上に涉つて演說したことはない。』

玩味すべきの言となす。

米國の隱者フランク

米國紐育にフランクといふ仙人があつた。彼はヴアン・コストランド公園の中に、小屋と穴とを作つて、其中に十五年餘も住して居つた。

此に不思議なのは、其長年月の間、未だ曾て人と談話を交へたことがない。彼自身は何れの國語も解しないやうな樣子であるけれども、佛語と伊語を知つて居つたといふ噂がある。

この仙人の住宅といふのは、高さ僅に三尺、四壁に板を立て掛け、泥と石とで其上を圍つて居つた。故に此家にはいる者は、四つ這ひにならぬとはいれない。

彼は洗濯などいふそんな贅澤なことはしない。またその生活の樣を詳しく知る者もない。唯だ毎週二回夜明方にその住ひを立出で、正午に食物を携へて歸るのを見るのみである。

彼が支那か日本にでも生れたら、天晴れ尊信の的となるべきを、西洋に生れたのこそ運の極みである。

ジスレリーと蓮磬花

英國ビーコンスフイルド侯ジスレリーは、一日、公園を散歩して、蓮磬花の美しく咲いて居るのを見、友人に向つて、

『この柔かに綠なる蓮磬花の葉を摘んでサラツトにして食つたら、定めて甘い

ことであらう。』

然るに此事が次第に世に噂されて、

『ジスレリー氏は非常に蓮磬花が好きださうだ。』

といふことになり、遂には彼の率ゐる保守黨の符號となるに至つた。

而て其後彼を尊信する貴婦人連が、新に婦人保守黨を組織するや、其名を『蓮磬花同盟』と命じた。また彼の死後ロンドンの紳士淑女は、その頭髪又は衣襟に此花を折つて挿し、以て弔意を表したといふ。

英雄の一言、嬉戯に出づとはいへ、その勢力恐るべきではないか。

人の顔は他の動物に似たり

骨相學者の說によると、人間の顔は大抵他の動物に似てゐるといふ。

女小說家ジョージ・エリオットは馬面であつた。チャーレス・ヂッケンは狗面であつた。我國では故人成島柳北翁など亦たエリオット黨であつたといふ。

一體に英米諸國は狗や馬を愛することが甚しいからであらうか。人の顔まで犬馬に類してゐるといふ。

また一事一業に成功したり成功する程の人物は、多くは烱々たる眼光と、鷲鼻とを有する。平々凡々の人は斯る容貌をもつてゐない。けれど婦人にして斯る相貌を有するものはよくないといふ。また人の顔にして羊に似たのは、愚鈍柔順の象徵であるとの話。

奇術師ウーデン蠻人の惑を解く

亞弗利加北部のアルゼリア國は、前世紀の初めから佛領になつたのであるが、今から四五十年前までは、そこにマラボーツといふ種族があつた。此種族は、

『吾々は鬼神から不思議の妖術を行ふべき力を受けてゐる。』

と稱して、良民を惑はし、知識の發達を妨げた。そこで佛國政府は大に憂へ、奇術師ローベル・ウーデンを使ひして同地へ派遣した。抑もウーデンを遣した趣旨は、

第一、歐羅巴人はマラボーツ族よりも更に不思議の術を行ひ得るといふことを示し、

第二、此等の奇術は、科學を應用したものであるから、熟練によつて何人も行ひ得べく、決して鬼神の與ふる力によるものではないといふことを知らせる爲であつた。

そこでウーデンは同地に至るや、『重い葛籠』といふ一奇術を演じた。然るにかの蠻人等は之を觀て且つ驚き且つ怖れ、以後右の如き妖言を口にすることなきに至つた。

アグネス・ポツト男裝して搭闘す

アグネス・ポツトの父、嘗てリングスデールといふ者と土地を爭ひ、遂に、

『双方論地に立會つて、武を角し、勝つた者は其土地を所有すること。』
と結約した。然るに生憎のことには、期日に至り其父が俄に病に罹つた。
此に於て娘アグネスは、父が權利を失はんことを恐れ、且つ世人から、
『彼は自分が惡かつたから立會に出きらないのだ。』
と嘲笑されんことを患へ、自ら甲冑に身を固め、手に武器を提げ、馬に跨り、
鞭を揚げて約束の場所へと赴いた。リングスデールの方でも亦た馬を飛ばして
來り會した。此に於て兩人は馬上を以て格闘すること數十合、卒にリングスデ
ールを馬より突き落し、凱歌を奏した。かくて被女は兜の緒を解き、毛髪を後
へ垂れ、胸を露したので、敵は始めてその一女子たることを覺つたといふ。
後アグネス・ボットの子孫は、兜の飾りをして、一婦人が髪をふり亂し、胸

を露してゐる圖を用ゐた。英國のダットレーなどの如き是である。

睡眠政治家ノース卿

米國が獨立戰爭を起して英國の虐政の下から逃れようとしてゐる最中に、時の英國首相ノース卿は、眠つたふりをして通した。

一日、卿は海軍大臣アイザック・バレーが今や英國海軍に就ての演說酣なるとき、その友人に向つて、

『バレーは我々に我が海軍の歷史を、而も今までの人口に膾炙して知らぬ人なき名譽ある戰爭まで拔きにせずに聽聞させる積りらしいが、拙者は一息眠るから、せめて我々の時代まで漕ぎつけたら起して呉れ給へ。』

とて、コクリ〳〵と寢入つてしまつた。
暫くすると件の友人はノース卿をゆり起した、卿は乃ち、
『今は何處ら邊だね？』
『一千六百九十三年和蘭との間に起つたラオーグの戰にございます。』
『いや君の起してくれたのは百年早過ぎた。』
とこぼしたといふ。
また或る時ノース卿の反對黨なる一人は、論難攻擊の演說中、頓に語調を變じて、
『國家危急の眞最中たる今日唯今すらも、かの卿は眠つてござる！』
と絶叫した。すると、今まで眠つてゐると思はれたノース卿は、聲を勵まし之

に應じて、
『拙者は寢て居たらよかつたらうと思ふのさ！』

詩人スカロン怪鳥となる

佛國の有名なる詩人スカロンがメーヌに居た頃、マルヂーグラーとて戒肉節の最終の日に、遊樂をする風俗があつた。
或る年恰も此日に當つたので、群衆は或は徒步し或は馬に乘り、車を飛ばし、自働車を駈り、假裝行列をしてアンシエル街上をねり步き、奇異の服裝を以て人目を惹かうと、色々の趣向を凝した。
スカロンは此日マンスといふ處に在つたが、

『何か奇拔なことをして衆人をアッといはせてやらう。』
と考へた。友人等も亦彼が如何なる奇裝をするかと評判して居つた。
然るにスカロンは一計を案じ、全身に蜂蜜を塗りつけ、鳥の羽の一ぱいはいつた桶の中へ入ひつたので、滿身これ羽毛といふ奇觀を呈し、忽ち一羽の人面鳥が出來た。
此に於てスカロンは急ぎ街頭に立ち現れた。すると群衆は、
『怪鳥！怪鳥！』
と口々に叫んで、その跡につき隨ひ、他を顧みるものがない。暫くして子供等が四方から群つて來て、怪鳥の頭を目がけて瓦石の雨を降らすこと頻りである。
此に於てスカロン大に辟易し、韋駄天の如く逃出した。

辛うじて彼は重圍を脫したけれども、全身疲れ、汗出で、殆ど耐へ難いので、エーヌ河に跳入り、衆人の眼前にて消え失せたと見せかけ、窃に橋下に潛み、身動きもしないで半日許りじつとしてゐた。やがて夜に入り密かに家へ歸つたはよかつたが、憐むべし此時より彼は終身のゐざりとなつた。

過を改むる者はまた人を匡す

己れの過を改むるに吝ならざる者は又人の過を匡す。チヤタム伯ウイリヤムピットは、英國の有名なる政治家である。而て彼が始めて政界に投じてから、政敵として終身覇を爭うたのはロバート・ワルポールである。然るに伯の雄辯は人を感動せしむること多大であつたので、流石老功なるワルポールも、

『吾人はこの恐るべき騎馬武者に鼻綱を付けてやらなければならぬ。』
と叫んだことさへある。されど伯も亦大にワルポールを憚つて、
『ロバート・ワルポールは、甚だ才能に富める宰相である。』
と演説して、大に賞讃の意を表した。然るに此時列席の代議士中には、私かに笑ふものもあつた。そこでピットは更に附言して、
『余はワルポールの關税案に反對したことを回想するにつけ、益々余の非を悟つた。前日の過を改むるを憚る所の議員諸氏よ、笑ひたければ笑ふがよい。今は亡き人の數に入れる宰相を賞讃するも、余は決して追從でないと信ずる！』
と喝破したので、滿場の議員、沈默して大に愧づるところあるが如くであつた。

實に己れの過を改むるを憚らないものは、人の過を匡すに嚴である。或日のことチャスターの裁判長モルトンは、議會にて演説中、
『國王、上院、及び下院。』
といひ、或は順序を變じて、
『下院、上院、及び國王。』
と言つた。然るに此時ピットは起立して、
『モルトン氏の言は議場の秩序を紊亂するものである。』
と叫び、更に語を改めて、
『余は今日まで屢々この議會に於て甚だ驚くべき演説を聽いたことがある。然れどもモルトン氏の一言の如きは殊に余の全身の血をして冷かならしむるもの

である。余はモルトン氏の言を特に筆記せられんことを希望する。』
と敍べたので、書記は其言を筆記した。するとビットは更に大聲を發して、
『願くは其筆記を余の席まで持ち來られよ。』
と請求したので、モルトンは大に狼狽して議長に向つて、
『余は只今ビット氏及び議會を怒らしむるが如き言を發したのを深く悲む。余は國王上院及び下院といふも、上院國王及び下院といふも、將た下院上院及び國王といふも、決して何等の他意なきを誓ふ。決して他意なきを保證する。』
此に於てか、ビットは復た起つて、
『余はも早此事に就て論ずるを好まない。モルトン氏にして一たび其過を覺つた上は、も早罪人ではない。余は大に足下を尊敬する。故に今其敬意を表す

るため、一事の足下に向つて助言すべきものがある。曰く、足下若し他意なきを誓つたらば、決して何事をも言ふことなかれ。』

モンテイニユ亂に遭うて門を鎖さず

嘗て佛國に内亂があつて、雨黨互に相鬪ひ、人心恟々たる時に當り、只一人モンテイニユのみは、自宅の門を開放して敢て恐るゝ色がなかつた。そこで世人は、
『モンテイニユの德は、その危難を防ぐに足ること、一隊の兵馬に勝つてゐる。』
と評した。

堯帝三尺の土階は、始皇帝の萬里の長城に勝る、といふ喩も思出されて床しい。

アーノルドの德行

アーノルドは平生自ら說いて曰く、

『人たるもの天地の間に生を受けた以上、必ずそこに天から與へられた何等かの職分がある。而てこの職分を完うするために各自に才能といふものを賦與されてゐる。故に如何なる職業に携るものと雖も、人間が各々その職分を完うすることは、これ天に進むの道である。』

彼は此言を口にしたばかりでなく、また能く實行した。故にその門下よりは幾多の英才を出した。

印度に於て曾て名を揚げたホドソンも亦、その德化を受けた一人であるが、印度からその家鄉へ宛てた手紙に、

『恩師アーノルドの德化實に恒久にして强し。余今日印度にありて切にそを感ず。』

といふ一節がある。之を見てもアーノルドの平生を察することが出來る。

森林生活の著者トロー

『森林生活』の著者トローは、幼より自然を愛し、獨居を好んだ人であつた。彼は學生時代には動植物の採集を好み、印度人の原始的な遺物を蒐集し、天

慕生活をすることが度々であつた。

一日、彼は母に向つて、

『お母さんは私が將來何になるのをお好きですか？』

『お前が社會に出て雄飛するのが好き。』

母のこの答を聞いて、彼はハラ〳〵と涙を流した。社會の名利を顧みずして、一向に自然をのみ愛した彼は、失望したのである。彼には永久にこのコンコルドの山奥が床しかつたのであらう。

神と爭ふを欲せざるトローの臨終

トローが病を以て將に死なうとする時、一日、友人カンニングは彼を訪れて

色々と慰めた。トローはその厚意を謝して、

『終りあるといふことも善いことだ。』

と言つた。また友人アルコットが來訪した時は、

『余は此世に何等思ひ遺すこともない。』

と物語つた。また他の一友人に對しては、

『余は子供の時から、人間には死といふものがあると聞いて居るから、今更ら驚かぬ。死は余に近く迫つてゐるが、また君等にも遠くない。』

と言ひ、更に、

『如何してそんなに心が平和に保てるのか？』

と怪む者があると、

『余は神と爭ふたことがない。』
と答へたといふ。また死に就て、
『死は同時に二つの世間を知ることが出來るものである。』
と語つて、やがて心靜に永眠した。

ドリウ少年に諷せられて發奮す

英國の有名なる著作家ドリウは、初め其家甚だ貧しく、靴を造りながら學問に志して居つた。然るに當時世間には政治熱が盛であつたから、ドリウも屢々靴を造りやめて大道演說などをやつた。
一夜、彼は遲くまで靴を送つて居ると、一少年が戸の隙間に口をあて、

『靴屋よ、靴屋！夜は夜働き、晝は晝働き！』
と、大聲にからかつて逃げ去つた。
そこでドリウは後に之を友人に話すと、友人は、
『なぜ追ひかけて引捕へないのか。』
ドリウは撫然として、
「いや〳〵、余は此語を聞いた時、思はず作業の槌を取落した。而て獨り熟々考へるには、なる程小僧はよく注意してくれた。以後余は行を改め一心に勉强しようと。實に彼の一聲は余にとつて神の聲であつた。最早貴重なる晝の時間を無駄に費すことはすまいと思ふ。』
と語つた。これぞ彼が靴工より著作家へと轉ずる動機となつたのであつた。

平凡なる偉人ロバートソン

高潔なる英國の傳道者フレデリック・ロバートソンは、青年の頃頗る平凡にして、將來は何にならうかと迷つてゐる程勝れた才能がなかつた。初め彼は軍人にならうと思つて、印度守備兵を志願した。而てまだ其許可のない時のことである、一日、その隣家に病を養うてゐる一婦人から、

『あなたのお宅の犬が毎晩々々吠えて眠られないから、何處かにやつて下さい。』

と、抗議を申込んできた。そこで彼は早速承知して、お詫旁々お見舞に出かけた。その時先方に居つたのが、後年彼の無二の親友たるデビスであつた。

デビスは初めてロバートソンと談を交へて、彼が非常に宗教心に篤い青年であることを知り、頻りに傳道師たれと奬めた。そこでロバートソンは、

『切角軍人に志願はしてゐるものの、此知己の誠心に背くのもよくない。』

と考へ、爰に翻然として宗教界に身を投ずることゝなつた。

かくてロバートソンとデビスとは、二人手を携へてオクスフォードの神學校に入つたが、入學後僅かに五日しか經たぬのに陸軍の指令書が着いた。然し彼は斷乎としてその任命を辭退するの外なかつた。實にこの五日こそは、彼が生涯の運命の岐るゝ秋であつたのである。

ロバートソンとラスキンとの立會演說

ロバートソンは幼時最も自然を愛好した人で、常に森林を逍遙し、小鳥の囀りを聽くのを無上の樂とした。彼は鋭い感性と、奔逸なる想像力とを有し、また武勇談などに昂奮し易く、また悲哀に情を動かすこと强く、全く詩人肌の人であつた。

彼はまだ學生時代に、ある討論會の席上に於て、ラスキンと立會演說を試みた。然るにロバートソンは中途からブル〳〵慄えて來たので、隣席なるデビス君に向つて、

『君、僕の爲に祈つてくれ給へ！』

と言つた程であつた。ところが後數萬の生靈を濟ふ不朽の傳道者となつたのである。

トルストイ美貌を神に祈る

露國の文豪トルストイ程眞理の發見の爲に悶へた人は少い。

彼は或る時自分の肉體をして如何なる苦痛にも堪へしむる爲に、非常の痛苦に耐へて、五分の間タチシエーフの大辭書を持ちながら、其腕を伸して立つてゐた。また臺所にはいつて、裸體になりながら、血の出る程その背を打ち据ゑた。斯る奇行は皆彼が深痛なる懷疑の悶へから脫れようとして爲したのである。

また彼は或る時は床上に横はりながら三日間も小説に讀み耽り、或る時は財布の底を叩いて薑餅や蜜を買つて來て貪り食つた。

彼の奇行はその少年時代から既に演ぜられた。誰もトルストイの容貌を見て、その猿の如く、又百姓のやうな顔を、美しいと思ふものはあるまい。彼は自分の顔の醜であることを知つて居つた。そこで少年時代に大變心配して、或る時窃かに神前に跪づき、

『神よ、私の顔をどうか美しく作り變へて下さい、どうか〳〵作り變へて下さい。』

と禱つたといふ。

理論と實際との衝突

トルストイは、一日、白紙を取出してそれに直線を引かうとした。然るに生憎定規がなかつた。そこで已むを得ずその代りに羅甸辭書を用ゐたが、旨くゆく筈はない。忽ち汚點を附けてしまつた。

彼は此汚點を悲しげに打眺めて、

『心中に描いてゐる線は此の如く明白に而も立派であるのに、之を紙上に投出するときには、何故にかくも見苦しいものとなつて現れるのであらう。あゝ人間萬事すべてこれか。理論を實際へと移さうとすれば、あゝ凡てこれか。』

と、喟然たること久しかつたといふ。

靈に動く青年傳道師ブース

救世軍の大將ウイリアム・ブースは、十四歳の時ある商店に小僧として雇はれた。一夜、彼は仲間の小僧連と打連れて街頭を談笑しながら歩いて居つたが、圖らずもウエスレアン教會の前へとやつて來た。すると仲間の一人が、

『一つひやかしに此中へはいつて見ようじやないか。』

と言出すと、他の連中は、

『はいらう〳〵。』

と同じて、ドヤ〳〵と教會の中へはいりこんでしまつた。その夜の說教者は有名なるマースデレ牧師であつた。牧師は話の中に、

『時計の音がコチ〳〵と鳴つてゐる間にも、世界の何處かには、冥途に向つて旅立ち、その平生の罪惡によつて地獄へ落ちてゆく人が、必ずあるのである。』

と言つた。ブースは初めひやかし半分に聽いてゐたが、此句に至つて、慄然として感動して、肌に粟の生ずるのを覺えなかつた。

その晩から彼は翻然として傳道家たらうとの志を立つるに至つた。とはいへ、悲しいことには身は一小僧の無學漢に過ぎない。さればとて此のやるせない志望を捨つる譯にも行かぬ。とつおひつ思案に暮れた末、彼は商店を辭し、クック博士の書生として住ひ込んだ。

彼は博士の家にあること半ケ年、晝夜勉强を怠らなかつたので、博士は彼の篤學に感じ、六ケ月ならざるに彼を青年傳道師として倫敦へ送つた。

ブースはもとより無學なる一傳道師である。然し彼のうら若い胸には常に新なる靈感の焔が燃えてゐた。この力は、毎夜教會に多くの信者を集め、多くの悔改者を出し、爲に彼の名は忽ち倫敦全市に聞え、更に地方から續々として招待の手紙が舞込むやうになつた。而て悔改者の數、四ケ月間に實に一千七百三十九人の多きに上つたといふ。時に年僅かに二十五、近代救世軍の大立物として嘖々たる名譽を荷つたのは、全く彼が胸中に燃ゆる熱烈なる靈火の致す所である。

ゲーテも人を叱る時あり

獨逸の文豪ゲーテは、日頃、

『凡そ人間は如何なる種類の者にあつても、其人は一般的の通性を具ふると共に、個人によつて特殊の性質を有するものである。而てこの個性といふものは、縱令それが厭ふべき性質のものであつても、凡て之を神に得たものであるからその人にとつては失ふことの出來ぬ寶である。』

と考へてゐたので、ゲーテは決して人を謗るやうなことがなかつた。從つて彼は自らの敵たるべき者に對しても、常に虛心平氣を以て之に對し、常に傍觀者たるの地位に立つたけれども、一度相手が卑劣な行爲を表したり、又たは他を卑下するが如き態度を現した場合には、些かも容赦しなかつた。故に彼は言つて曰く、

『人間は時に勘忍しないといふことも必要である。勘忍しないといふことがあ

るからして勘忍することに意味があるのである。』

ゲーテとミルレルとの交情

ゲーテが殆どその生涯を費して作つた所の『ファウスト』は、著手の始め一時中止して居つたが、シルレルと相識るに至り、彼に勵まされて再び筆を呵したのである。

またゲーテはシルレルを最もよく理解し、且つ彼を賞讃した人である。シルレルの病が次第に重くなつた頃、ゲーテは獨り庭に佇みながら、シルレルの事を思ひ浮べ、來し方行末を案じて、涙を湛へて居ることさへあつた。

而てフォッスがシルレルの危篤なることを詳しく報じてくれた時、ゲーテは、

『運命とあれば致方がない。人間といふものは實につまらぬものだ。』

といつて、殆ど失望せぬばかりであつた。

やがてシルレルの訃報が着いた。其時ゲーテは病褥にあつたので、彼の妻は、

『良人に知らせてよいものかしらん。』

と案じ煩つてゐた。するとゲーテは、

『シルレル君の病氣はどうなつたかね！　まだ便りは來ぬかしらん？』

是に於て夫人はも早溜らなくなつて、無言のまゝ高く啜り泣いた。ゲーテは之を見て、

『死んだのか?!』

『あなたは御自分で仰つしやつてしまつた。』
『死んだのか?!』
ゲーテは其儘夜具を引きかついでたゞ泣くのみであつた。

ゲーテの臨終

ゲーテが晩年病の床に臥し、重態に陥るや、看護に窶れた夫人を顧みて、
『死と生との闘の始まる時刻が來たやうだ。』
と言つた。また醫者に向つては、
『君は藥を盛るに餘り小膽過ぎる。予のことはそんなに心配する必要はないから、斯る重病人を扱ふには、宜しくナポレオン的に思ひきつた方法を施すがよ

い。』
と言つた。

輕薄なる信者を誡む

一日、來世を信じてゐるといふことを誇りにして居る婦人連が、ゲーテを取圍んで、喋々として來世のことを論じ、如何にも輕薄に演べ立てた。そこでゲーテは堪へかねて、
『現世で死んでも冥途で生きて居られるとは實に結構な話だ。然し予は冥途へ往つたら、あなた方のやうな信者と面會しないやうにしたい。』
と、その輕薄を諷刺したので、婦人連は大變怒つて、歸つてしまつた。